

盾の勇者が廃人

宵影

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もしも尚文の世界にも他の勇者の世界と同じゲームがあつて、

尚文がそのゲームの廃人プレイヤーだったら？

そして強くてニューゲーム状態だったら？

目次

よくある召喚もの	1
廃人紹介	4
廃人相談	18
廃人にやる金はねえ!!	31
廃人の世界	41
裏切りの対価	51
お子様ランチの刃	75
襲来	88
魔王廃人VS上級廃人	110
矛と要塞の実践	120
廃人式卵ガチャ	132
復興への道々廃人を添えて	142

よくある召喚もの

「ん？」

俺は今日、導かれるように図書館へ来ていた。

俺、岩谷尚文は大学二年生の廃人ゲーマーだ、人よりも多少財産を投げ捨てる人物であるとは自覚している

様々なゲームにアニメ、小説や漫画と多方面に手を伸ばしているが、単位を落としたりことはしない、しかしそんな俺から目を離し、弟に美人な家庭教師をつけているのはなぜだ

美人な家庭教師が付いた弟は瞬く間にプレイボーイと化し、今では家庭教師と禁断の恋に落ちようとしている

しかし、廃人ネットワークでかき集めた情報では家庭教師は無自覚天然で沢山の男を泣かせてきたようだ、兄としては弟の初恋のため応援したいが余計なこと言つて弟と家庭教師の間に亀裂を入れたくないので廃人仲間と毎日経過報告をしている

さて、話は脱線したがその日、俺は数多のゲームで鍛えた勘に導かれて図書館に来ている、両親がくれる軍資金は0、そのため給料のいい仕事を休みの午前から入り夜は睡

眠時間を削って廃人仲間置いて行かれないようにしている、この間も食費削って課金してしまっただけな

両親は軍資金をくれないため生活費はさすがに残してはいるが…

んだ。

話がそれだが、俺は自分のゲームのもととなったファンタジー小説を扱ってるコーナーへ目を通していた

なにせ自分のやってるゲームにはストーリーモードがあり、マルチルート&マルチエンディングがあり、トゥルーエンドは一つしかないのだ、しかもその過程が鬱展開のオンパレードで、数多の実況者が挑んだが全てが途中で終わっている、とある実況者はヒロインの一人がプレイヤーをかばって死ぬシーンで号泣し、その後の負けイベントをノーダメージで勝利したがその後の動画は上げられていない

ついでに言うとそのゲームは選択できる職業が4つしかなく、そのうちの盾の職業が異様なまでにハードな難易度となっている、

その分感動できるシーンや、達成感のあるストーリーなので今もたくさんプレイヤーが挑み、屍を築いている

そしてそのゲームには大量のサーバーがあり定期的にサーバー同士で戦争遊戯が行われている

サーバー毎に特徴があり新しいサーバー程纏まりがなく大多数のプレイヤーが正面突撃を行い、少数のプレイヤーが裏に回るといった行動をする

そのため対処がテンプレ化し、新サーバーが勝てる見込みがないのでアップデートで、盾の上方修正と共に古いサーバーは攻め、新しいサーバーは守りとなった、

暫く探したが、貸し出されているのか小説が見当たらないため諦めて家に帰り、ゲームの電源を付け、一番古いサーバーに入ると、廃人仲間がすでに待っていた

「遅いぞ、『フォートレス』」

「スマン、ってか集合時間の30分前じゃねえか」

「周りをよく見ろ、今回は待ちに待った俺らが攻撃側だ、早くしないと梓埋まるぞ」
「マジ?行ってくるわ」

廃人仲間と少しだけ会話し、攻勢メンバーにエントリーしようとすると、急に眠気が襲ってきた、

「うお……まじか……」

やばい……眠い……だが……せめて……エン……ト……リー……zzz

エントリーボタンを押す瞬間、俺の意識は遠ざかっていった

まさか、ここで寝落ちするとは……

廃人紹介

「おお…」

感嘆とした声にハツとする

まとまらない視線を無理やりまとめ周囲に目を走らせるとローブを着た男達がこちらに向かって頬を染めていた、やめろ、そんな目を向けるな

「なんだ？」

声のする方に目を向けると俺と同じようにいまだに状況を理解できていない男が三人

敵に廃人が居たらリススキル祭りが開催するな

というか俺さつきまでゲームしていたはずなんだが、いや、このシーンは見たことがある

ストーリーモードの最初のシーンだ、辺りを見渡すと予想道理石造りの壁が目に入る、壁のシミの場所も同じだ

下を見ると蛍光塗料を塗って作ったかのような魔方陣が俺が立っている…祭壇の上
に書かれている

右手には使い慣れた盾を持つているが、ゲーム世界と違い離れる気配がない

「…で、()は？」

とりあえずこちらから話しかけなければゲームでは1週間たつても進まないためこちらから話しかける

「おお、勇者様方!!どうかこの世界と私を救ってください!!」

どうやらこいつはホモに囲まれた空間に居るのが嫌なようだ

「「はい?」」

足元で理解できていない三人が異口同音に返事をした

「それはどういいうみですか?」

何百と聞いたフレーズを聞いた

「いろいろと込み合った事情があります故、端的に言わせていただきます、勇者様たちを古の儀式で召喚いたしました」

「召喚…?」

足元の槍を持った男が聞き返す

「はい、この世界と私の貞操は現在、存亡の危機に立たされています。勇者様方、どうかお力をお貸しください」

足を生まれたての小鹿のように震わせたローブの男性が俺たちに深々と頭を下げる

「まあ、話だけなら「断る」「拒否します」「報酬は？話はそれからだ」(#ω)・・・」
俺が話を聞こうとすると他の三人が遮るように喋る

ほう…廃人を敵に回すか(極小の器)

必死に頭を下げるから話を聞こうとする俺の話の話を遮るとは…いい度胸だ
俺が無言の圧力をかけていると三人はこちらに視線を向ける

ほう、俺の無言の圧力を受けてなお半笑いか

…あれか？Mか？Mなのか？なんで若干嬉しそうな顔してんの？

まあ違うだろうしどっちかというとき異世界転移にあこがれる中二病患者なのだろう
だがその態度はいけない、いけないのだよ…

「人の同意なしにいきなり呼んだ事に対する罪悪感がないのか？」

剣を持った男が剣先をローブの男に向けながら言う

…ああもうローブの人の足が残像残してんじやん

「仮に、世界が平和になったらポイと元の世界に戻されたらただ働きですしね？」

弓を持った少年が矢をつがえながら言う

おいおいローブの人分身しそうなくらい震えてるじゃねえか…

「こつちの意思をどのくらいくみ取つてくるんだ？ 場合によつては俺たちが敵に回るかな？」

槍を持った男がこれでもかと言わんばかりに槍を回しまくる

おお、ローブの二人二人に増えたぞ

「ま、まずは王様と謁見して頂きたい、報奨の話はその場でお願ひします、あと私の貞操を……」

ローブの人が重苦しい扉を開けて道を示しながらこちらに助けを求める

「しょうがねえな」

「ですね」

「ま、どいつを相手にしても変わらねえけどな」

「で、では!!」

「「お前の貞操は知らん」」

「そ、そんな!!」

哀れにもローブの人の助けを求める声は一蹴され、俺含む勇者たちは部屋から出る

「ヒィ!! た、たすk」

部屋から出たとたんローブの人は後ろから伸びてきた大量の手に部屋に引きずり込まれ、すさまじい勢いで扉が閉まった

「…俺は無力だ」

「いえ、あなただけの責任ではありません…」

「かわいそうに」

見捨てたのお前らだろうに

悲劇を見届けた後、俺たちは石造りの道を歩く。

…ここイベントシーンで操作不可だったせいでRTAの鬼門だったんだよなあ…

窓から見える光景に三人が驚いているのを他所にそう思う

時折後方から響く声を無視し暫く歩き、謁見の間に辿り着いた。

「ほう、こ奴らが古の勇者達か…」

謁見の座にある玉座に腰掛ける、弓の勇者RTAで輪郭が消えるほど射抜かれる偉そうな爺さんが俺たちを値踏みしていた。

数多のプレイヤーから評価が下がるくらい印象の悪い顔をしながらやってくるのでいまだに評価が5に行ったことがない

やはり人をなめ腐ったやつは評価を下げる原因になる

「ワシがこの国の王、オルトクレイメルロマク32世だ。勇者共よ顔を上げよ」

矢に射抜かれすぎたせいで目腐ってんのかこの王

「さて、まずは事情説明せねばなるまい。この国、さらにはこの世界は滅びへと向かいつつある」

夏休み前の校長の話より短く終わったため細かいところが通じない方のために説明すると

竜刻の砂時計が落ち切ったときに強制招集あるからそれまでレベル上げという

以上だ

「話は分かった、で？俺たちにタダ働きをしろと？」

「都合のいい話だな」

「……そうだな自分勝手としか言いようがない、滅ぶなら勝手に滅んでくれ、俺達にはどうでもいい話だ」

こいつら自分の言葉が原因でпойされる未来を見ないのだろうか？

内心大喜びの癖に男のツンデレとか需要のない事しやがって

まあこの王は俺も気に入らないし便乗しとくか

「確かに、助ける義理がないな、対価があるのならともかく、ただ働きした挙句、平和になったらはい『さよなら』なんてされたらたまったものじゃないし。」

「というか帰れる手段があるのか聞きたいし、そのあたりどうなの？」

「ぐぬ……」

他人には見えない、インベントリを確認しながら問うと、王は臣下に向けて視線を向ける

「もちろん、勇者様方には存分な報酬を与える予定です」

俺を除く勇者たちは小さくガッツポーズした

話し合いの第一歩だな

「他にも援助金の用意もできております、ぜひ、勇者様達には世界を救っていただきました、そのための場所を整える所存です」

「へー……まあ用意してくれるのならいいけどさ」

「俺たちを飼いならせると思うなよ？ 敵にならない限りは協力してやる」

「ですね」

こいつらはなぜ上から目線なんだ……

現状国を敵に回して困るのはお前たちだぞ

まあ、ここは廃人プレイヤーである俺がすっかり手綱を握らなきゃな、こいつら全員が初心者の可能性がある

「では勇者たちよ、それぞれの名を聞こう」

最初に剣を持った男が前が出る

「俺の名前は天木錬だ、歳は16、高校生だ」

剣の勇者の名前は天木錬か、外見は整っており、あちらの方々に人気そうな顔つきをしている、体格は目測だが160cmより少し上だな

もう少し小さかったら男の娘とか言われそうな感じだ、髪型はショートヘアで若干茶髪だが金のメッシュが入っている

切れ長の瞳に引きこもり特有の白い肌で、細身の剣士といった感じか

「じゃあ次は俺だな、俺の名前は北村元康、年齢は21歳、大学生だ」

槍の勇者の名前は北村元康か、外見はホストクラブの呼び込みとかやってそうな見た目で髪型は後ろにまとめたポニーテール、男がポニテとかw、と思うが似合う人は似合う

あと子供受けしそう

「次は僕ですね、僕の名前は川澄樹、年齢は17、高校生です」

弓の勇者の名前は川澄樹、外見は細身の少年といったところか、口調と言い佇まいと言いいいとこの坊ちゃんといった感じがする

髪型は若干パーマが入ったウェーブヘア。

ただ寝てる途中に呼ばれたのか寝癖が付いている

ふむ……みんな日本人か、外国人がいれば少しやりやすかったのだが

よし、最後は俺だな

「最後は俺だな、俺の名前は岩谷尚文。年齢は20、大学生だ」

王様はなめるような視線を俺に向けてくる、

潰したるか

「ふむ、レンにイツキにモトヤスカ」

「けしとb……王様、俺を忘れてます」

「おお、すまん、サオフミ殿」

なんて間違え方済んだこの粗大ごみが焼却すんぞ

まったくなんて腐った爺だ、そりゃあ……この中じや場違い感があるとはいえわざと忘れられるのは結構来るんだぞ

いいのか？ 暴れるぞ？ 非公式筆頭裏ボスが暴れちゃうぞ？

「では皆の衆、己がステータスを確認し、自らを客観視してもらいたい」

「へ？」

元康が何それといった感じの声を上げた

「えっと、どのようにして見るのですようか？」

樹がおずおずと王様に進言した

まあいきなりステータスとか言われても混乱するよな

俺？すでに確認済みですよ？ゲーム時代そのまんまだったけど

「なんだお前ら、まだ確認してなかったのか」

錬が知らなかったのかと言わんばかりの声を出す

なんだそのいかにも情報通ですって顔は

「なんとなく視界の隅にアイコンがあるだろ？」

「え？」

俺がそう施すと元康は視界の隅にアイコンを見つけたようだ、

声を上げたのは顔ごと視界の隅に移動させた樹である

「それに意識を集中してみろ」

樹の顔を固定して視線だけを誘導している錬がそう続けると

二人はステータスを見れたようだ

さて、もう一度自分のステータスを確認しよう、

俺が視界の隅のアイコンに意識を集中すると、ピコーンと、軽い音がして、目の前に

半透明の液晶画面が現れた

岩谷尚文

職業：盾の勇者Lv1 (Lv1000)

称号：絶対無敵亜音速反射走行要塞

装備：スモールシールド(霊亀の破城盾)

異世界の服(麒麟の装束)

スキル：パライ カウンター 身代わり 反射 全反射 レイジカウンター 加速

援護防衛 詠唱破棄 e t c . . .

魔法：略

【悲報】魔法覚えすぎて略された件

さつきも見たが実際の装備が○の中に表示されているのがわかる

しかし妙にゲームっぽいな……下手すると勇者三人がゲームの世界だと思い込みそ
うだな

「Lv1ですか……これは不安ですね」

「そうだな、これじゃ戦えるか不安だな……」

「とうかなんだこれ」

「勇者殿の世界には存在しないので？これはステータス魔法というこの世界のものなら
だれでも使える魔法ですぞ」

「そうなのか？」

現在の肉体を数値化して見れるのは便利だが盗み見られる可能性高いぞこれ……

「それで？俺たちはどうすればいいんだ？」

「ふむ、勇者様達にはこれから旅に出て自らを磨き、伝説の武器を強化して頂きたいのです」

「強化？伝説の武器なんだから最初から強くないのか？」

「はい。伝承によりますと召喚された勇者様は自らの所持する武器を育て、強くしていったそうです」

「伝承……ね。その武器が武器として役立つまで他の武器使えばいいじゃん」

元康が槍を扇風機のごとく回しながら意見する、

とりあえず樹が若干風圧に負けてることに気づけ

「そこは後々、片づければいいだろ、とにかく、頼まれたんなら俺たちは自分磨きをするべきだな」

異世界に呼ばれて俺TUEEEしたのはわかるが弱いうちにソロ活動は初心者のかをかぶった廃人のすることだ、見るからに初心者三人がすべき行為ではない

「じゃあ俺たちでパーティ組んでいくか」

「お待ちください勇者様方」

「なんだ？」

気を聞かせてパーティを組もうとすると大臣が進言する

「勇者様方は別々に行動していただきます」

「なぜだ」

公式みたいに俺をパーティ禁止にする気か

「はい、伝承によると伝説の武器はそれぞれ反発する性質を持ってしまして、勇者様達だ

けで行動すると成長を阻害すると記載されています」

「なるほど、パワーレベリング防止みたいな感じか」

よかつた…（；ω；）

ん？いつのまにか武器の使い方とヘルプが追加されているな

※他の武器を使うと拗ねます

かわいいかよ

「本当みただいな」

確認したのか鍊がそう答える

というかなんだこのフォントは、乙女か？乙女なのか？薬草でも生えてんのかこの盾
しかし長いな、あとでよんどこ

「となると仲間を募集した方がいいのかな？」

「ワシが仲間を用意しておくでしょう。なにぶん、今日は日も傾いておる。勇者殿、今日はゆつくりと休み、明日旅立つのがよからう。明日までに仲間になりそうな逸材を用意しておく」

「ありがとうございます」

「サンキュ」

それぞれの言葉で感謝を示し、その日は王様が用意した来客室で俺たちは休むこととなった

廃人相談

来客室の豪華なベッドに座り、みんなそれぞれの武器をマジマジと見つめながら説明に目を向けている。

窓の方を見ると何時の間にか日がとつぷりと沈んでいる。

それだけ集中して説明を読んでいる訳だ。

えっと、伝説の武器はメンテナンスが不必要の万能武器である。

持ち主のLvと武器に融合させる素材、倒したモンスターによってウエポンブックが埋まっていく。

ウエポンブックとは変化出来る武器の種類を記載してある一覧表である。

俺は武器のアイコンにあるウエポンブックを開くと液晶が壁の向こうへ消えていった

ええ……

む？この武器知らないな、おお、派生武器かすごいな

「なあ、この世界ってゲームみたいだよな？」

俺以外にもヘルプやらみているのだろう、俺の問いに空返事が返ってくる

「つていうかゲームだろこの世界、俺知ってるぞ、こんな感じのゲーム
やはり勘違いが出てくるか

元康が自慢げに言い放つ

「え？」

「というか有名なゲームじゃないのか？知らないのか？」

「へえ？どんな名前のゲームなんだ？」

「知らないのか？エメラルドオンラインっていうんだ」

「なんだそのゲーム、聞いたこともないぞ」

「お前ほんとにネットゲやったことあんのか？有名タイトルだぞ」

「俺が知ってるのはオーディンオンラインとかファンタジームーンオンラインとかだぞ

？有名だろ？」

「いや聞いたこともないぞ、そんなゲーム」

「え？」

「え？」

「皆さん何言ってるんですか？この世界はコンシューマーゲームの世界ですよ？」

「は？VRMMOだろ？」

「はあ？ネットゲの世界に入ったってコントローラーとかクリック操作だろ？」

元康の問いに鍊が首をかしげて会話に入ってくる

「はあ？クリック？コントローラー？何お前らそんな骨董品でゲームしてんの？今時のネットゲはVRMMOだろ？」

鍊の言葉に俺は首をかしげて返す

「VRMMOは最近出たばっかだろ？まだコントローラーとかクリックが主流だろうに、まだフルダイクは安全性が確立されてないはずだぞ」

「はあ!？」

鍊は声高々に異を唱える

そういえばこいつ俺以外で最初にステータスに気が付いたな

妙に手慣れてるな

「あの、皆さん、この世界のゲームの名前をなんと記憶してますか？」

樹が軽く手を上げて尋ねる

「ブレイブスターオンライン」

「エメラルドオンライン」

「四聖オンライン」

全員違う名前が出てきた

「あ、自分はディメンションウエーブというコンシューマーゲームの世界と記憶してま
す」

樹の方からも違う名前のゲームタイトルが出てきた

「まてまて、情報を整理しよう」

元康が頭に手を当てて俺たちをなだめる

「錬、尚文、お前らの言うVRMMOはそのまんまの意味でいいんだよね？」

「ああ」

「そうだ」

「樹は意味わかるか？」

「ええ、SF物のゲームにちよくちよく出てきます」

「そうだな、俺も似たようなもんだ、じゃあ錬お前のやってた……ブレイブスターオンラ
イン？それはVRMMOなのか？」

「ああ、俺がやりこんでたVRMMOはブレイブスターオンラインという、この世界はそ
のシステムに非常に酷似した世界だ」

錬の話を参考にと錬の世界のVRMMOはありきたりな技術で脳波を認識して
ゲームの世界へダイブすることができるらしい

「なるほど、じゃあ尚文の方……四聖オンラインもVRMMOか？」

「そうだ、ただ鍊のようなフルダイブ式はまだ安全性が確立されていないから操作はコン
トローラーかスティック型のコントローラーだ」

「OK、じゃあ鍊の世界で俺たちが言ったようなゲームが過去にあったか？」

鍊は首を横に振る

「それでもゲームの歴史には詳しい方だと自負しているが過去にお前たちが言ったよう
なゲームは無いな、だがお前たちの世界では有名なんだろう？」

俺も元康もうなづく

オンラインに詳しいのならば聞いたことがないのはおかしい

探す範囲が狭かったという可能性もあるが間違ってもタイトルは聞いたことがある
はずだ

「じゃあ一般常識の質問だ。今の首相の名前は言えるな？」

「ああ」

皆うなづく

「一斉にうなづく……」

変な空気が流れる

「湯田正人」

「谷和原剛太郎」

「小高縁一」

「老富士茂野」

「「……」」

聞いたこともない首相の名前だ、間違っても歴史の授業に出てきたためしは無い。

それから俺たちは、有名なサイトの名前やネット用語、有名ゲームの名前を尋ねあい、そのどれもが知らないという結論に至った。

「どうやら僕たちは別々の日本から来たようですね」

「そうだな間違っても同じ日本から来たとは言えないな」

「ということは異世界の日本か」

「時代が違う可能性もあるが、ここまで符合しないとなるとな」

なんとも奇妙な四人が集まったものだ、出身は同じ日本なのに世界が違うとはまあ全員オタクなのは間違いはないらしい

『頭のおかしい廃人』に俺のプレイヤー名が出てこなかったのは不思議だが

「このパターンだといろいろな理由で呼ばれた気がするな」

「無駄話は嫌いだが情報の共有は大事だしな」

鍊は何とも鼻にかかる、俺はクールだと言わんばかりの口調で話し出す

「俺は学校の帰りに運悪く巷を騒がす殺人事件に遭遇してな」

「ほう」

「一緒に帰ってた幼馴染をかばって脇腹刺されてながらも犯人を取り押さえたところまでは覚えてるんだが……」

……鍊は脇腹をさすりながら事情を説明している

幼馴染助けるとか異世界物の主人公じゃないんだから……今の状況も似たようなもんだだけぞ

……ふむ、嘘はついてないし見栄もはってないな

「そんな感じで気が付いたらここにいた」

「異世界物の主人公かお前は」

とりあえず思ったことを言っておいた

「じゃあ次は俺だな」

軽い感じで元康が自分を指しながら話し出す

「俺さ彼女多いんだよね」

「二股とか最低だな」

鍊が蔑む様な声で言ううと

元康は目をぱちくりさせて言い放った

「女の子って……怖いね」

「知ってるか？バカって死んでも治らないだってよ？」

中指立てながら告げる

次に樹が胸に手を当てて話し始める

「次は僕ですね、僕は塾の帰りに横断歩道を渡っていた時に……突然ダンプカーが下から生えてきましたね」

「いろいろ待ってほしい」

ダンプカーが下から生えるってなんだ？え？樹の世界ではそれが普通なの？

「あーいろいろ言いたいけど続けてくれ」

「はい、えっとそれでですね僕は生きてきたダンプカーに巻き込まれてしまつて……」
「……」

なかなかシユールだな…

しかしこれ俺浮いてないか？ゲームで寝落ちしたらここにいたとか言いづらいんだ
けど

いやでも嘘つくとなあ……

「あー……この世界に来たエピソード……話さなきやダメか？」

「そりやあみんな話してるからな」

「そうか……俺は四聖オンラインで月一であるサーバー対抗戦イベントで俺のサーバーがバランスブレイカー過ぎてな？ エントリー式なんだ」

「？ それだとそのサーバー対抗戦は自由参加なんですか？」

「ああ、サーバー対抗だからな、勝った時の報酬が美味いが負けた時のデメリットがサーバーのプレイヤー全員に行くからどのみち参加せざるを得ないんだ」

「その中で人数制限掛かるサーバーって……」

「6割廃人プレイヤーとだけ言っておこう」

「じゃあ尚文さんは……？」

「非公式筆頭廃人裏ボスって呼ばれるくらいには廃人やってる」

「えっと、それでどうしてこの世界に？」

「ああ、脱線したな、……まあそのサーバー対抗戦にエントリーしようとしたら急に眠気が襲ってきいてな？」

「「……」」

視線が冷たい

なんだ俺も皆みたいになんか方法で転移すればよかったのか？

そんな俺を放って三人はひそひそと小声で話し始める

「……あの人……盾……ですよね？」

「やっぱり錬のところもそう？」

「……ああ」

「「盾で廃人筆頭って……」」

聞こえてんぞこら

……ふむ

「お前らの世界で盾ってどの立ち位置なんだ？」

そう問いかけると三人は同じような反応を示す

「そうだなエメラルドオンラインだと、シールド……盾のことなんだが」

「うむ」

「最初の方は防御力が高くていいんだが」

「ふむ」

「後半だと火力が足りない上防御無視の攻撃が多くなって正直不遇職なんだ」

「……そうか」

なるほど、こっちの最初の方と同じ感じか

「不遇職なんだからアプデで上方修正とかなかったのか？」

職業バランスとか

「システム的にも人工的にもはや試練のレベルだからなあ……就職とシールドどっち難しいかと言ったらシールドの方が難しいって言われてるし」

就職へシールドって……

「なるほど、放置されてたのか」

「ああ、おまえらの方もそうだろう？」

と元康が錬と樹に目を向けると。

二人同時に目をそらした

「悪い……」

「同じく……」

なるほど、こつちとそつちじゃ盾の扱いが違うのか

深く考える俺を他所に3人はゲームの話で盛り上がる

「地形とかどうよっ？」

「名前こそ違うがほとんど一緒だな、これなら効率のいい魔物の分布も同じである可能性が高いな」

「武器ごとの狩場が多少異なるので同じ場所にはいかないようにしましょう」
「そうだな、効率とかあるだろうし」

……こいつらの目がチート貰った主人公みたいな目をしているな

まあ俺は実質引き継ぎ状態だから最悪ソロでもなんとかなるし、味方が弱くてもパワーレベリングがあるし

「よし、こっちはこっちで何とかしてみるところ……」

「勇者様、お食事の用意が出来ました」

お、食事が出るのか

「わかった」

気づいていない3人に声をかけ、扉を開け、案内の人に騎士団の食堂に招待された。

ファンタジー映画のワンシーンのような城の中にある食堂

そのテーブルにはバイキング形式で食べ物置いてある

「皆様、好きな食べ物をお召し上がりください。」

「なんだ。騎士団の連てy「ありがたく頂こう」

文句を言う鍊の言葉を遮り案内の人に礼を言う

おう錬なんだその「余計なことを…」と言わんばかりの目は

少し空気が硬くなったがその後は何事もなく、俺たちは異世界の料理を堪能した

お、オムレツあんじゃん

……オレンジ？

オレンジの味がするオムレツがあつたがそれ以外は特に変な味もせず、食事を終えた俺たちは、部屋に戻った

「風呂とかないのかな……」

「中世っぽい世界だしなあ……行水の可能性が高いぜ」

「言わなきや用意してくれなさそう」

「まあ一日くらいならいいか」

「それもそうだな。眠いし、明日は冒険の始まりだしさっさと寝ちまおう」

元康の言葉にみんな頷き、就寝に入った

明日から（味方の）地獄のレベリングか……

俺を含め三人とも明日が待ち遠しいと就寝した。

廃人にやる金はねえ!!

翌朝

朝食を終えて、王様から呼ばれるのを今か今かと俺たちは待ちわびた。

さすがに朝食後に騒ぐわけにもいかず、日の傾きから10時過ぎくらいになった頃俺たちは呼び出しを受けた。

待つてましたと俺たちは期待に胸を躍らせて謁見の間に向かう。

「勇者様のご来場」

謁見の間の扉が開くと其処には様々な冒険者風の服装をした男女が12人ほど集まっていた。

騎士風の身なりの者もいる。

ふむ……資質一般のない奴人ばっかだな……いや、単純に一般人の域を出られないだけか
俺達は王様に一礼し、話を聞く。

「前日の件で勇者の同行者として共に進もうという者を募った。どうやら皆の者も、同行したい勇者が居るようじゃ」

一人に付き3人の同行する仲間が居るのなら均等が取れるが、彼らが付きたい人を選ぶから平等に分かれないだろうな

「さあ、未来の英雄達よ。仕えたい勇者と共に旅立つのだ」

やはりな、まあ最低でも一人はついてきてくれるだろう

ザッザッと仲間達が俺達の方へ歩いてきて各々の前に集まっていく。

錬、5人

元康、4人

樹、3人

俺、0

この国消し飛ばしてやろうかな

「あー王様？これはちよつと予想外なんですが」

「う、うぬ。さすがにワシもこのような事態が起こるとは思いもせんかった」

「人望がありませんな」

事もあろうに呆れ顔で大臣が切り捨てる。

そこへいつぞや大扉に消えてったローブを着た男が王様に内緒話をする。

「ふむ、そんな噂が広まっておるのか……」

「何かあつたのですか？」

元康が微妙な顔をして尋ねる

さすがにこれは予想外だ、なんだ？こいつらは強さを求めないのか？謙虚な奴らだ、だから一般人なんだよ

あと大臣お前に人望がないとか言われたくねえ、少なくともお前の頭髪よりはあるわしかし異世界にきてなおソロプレイを強要されるとは……

「ふむ、実はの……勇者殿の中で盾の勇者はこの世界の理に疎いという噂が城内で囁かれているのだそうだ」

「は？」

「伝承で、勇者とはこの世界の理を理解していると記されている。その条件を満たしていないのではないかとない」

元康が俺の脇を肘で小突く

「昨日の雑談盗み聞きされたんじゃないのか？」

俺だけゲームのバージョン違うあれか？あれ原因で俺ソロルート構築したの？夜中

あんだだけ乱数調整したのに？

というかなんだその伝承。

まるで盾の勇者だけが別の世界の勇者みたいだな

そら他の勇者の世界の盾は不遇職だがこっちじゃ廃人盾一人いれば戦力ひっくり返るんだぞ？

「つーか錬、お前五人いるなら一人くらいこっち譲ってくれ、昨日乱数調整しながら考えたレベリングが台無しになるんだが」

何か怯える羊みたいで錬に同行したい冒険者（男を含む）が錬の後ろに隠れる。錬もなんだかなあとポリポリと頭を掻きながら見て。

「そうしたいのはやまやまなんだが選んだのは俺じゃなくてこいつらだからな……俺じゃなくてこいつらに言ってくれ」

困惑顔でいう錬に何も言えなくなった俺は、とりあえず元康に声をかける

「元康、お前の方は……梃子でも動きそうにないな」

「まあ……そうだな」

元康の方は女性のみが仲間になっており完全にハーレムが完成している

「偏るとは……なんとも」

樹も困った顔をしつつ、募ってくれる仲間を拒絶できないと態度で表している。

「均等に3人ずつ分けたほうが良いのでしょーうけど……無理矢理では士気に関わりそうですぬ」

樹の最もな言葉にその場に居る全員が頷く。

「くそーう……まさか俺の敵が運営だけではなかったとは……」

俺盾だぞ？ 盾の廃人筆頭ぞ？ 戦力でいえば村人Aと公式が用意したチートボスからの戦力差ぞ？

「あ、勇者様、私は盾の勇者様の下へ行っても良いですよ」

元康の部下になりたがった仲間の女性が片手を上げて立候補する。

……クレクレレのにおいがする、あとこいつそんなに強くならないな、限界まで強くして尚よくて終盤の中ボスにソロでギリギリ勝てるくらいだろう

「……お前じゃ俺のレベリングについてこれないからやめとけ」

「は、は、は」

見た目はセミロングの赤毛の女性で……あ、こいつ序盤で仲間になるとトゥルーエンド開くやつだ、終盤で仲間になると魔王ルート直行だけど

「なあそこの立候補してくれた女性や」

「は、は、は」

「お前は……我慢強いタイプか？」

「え?、はい……たぶん」

「よし、じゃあ他に俺の仲間になりたいなーって人手上げて」

誰も手を上げようとしねえ

そんな惨状を見てか王様が嘆くように溜息を吐いた

「しよがあるまい。ナオフミ殿はこれから旅先で気に入った人材を自身でスカウトして人員を補充せよ」

まあ、しようがないか

俺が氣にいるやつ全員国外だけまあ大丈夫だろ

「それでは支度金である。勇者達よしっかりと受け取るのだ」

俺たちの前に四つ三つの金袋が配られる……?」

さて、なぜ俺の前だけに置かれない、え?これ不思議に思ってるの俺だけ?

ちよつとそこの三人これ見よがしに金袋の音ならすな

「ナオフミ殿の分は横領にあつて今回はないが他の勇者殿には600枚用意した。これで装備を整え、旅立つがよい」

「はい!」

はい!じゃねーよ!!マジで!?マジで俺の資金0?てか横領つてこの国の金庫ひらつきばかよ!

ああもう錬達はなんか敬礼してすでに行きそうだし……ちくしよう覚えてろ！

錬達にし少し遅れて謁見の間から出ると、それぞれの自己紹介を始める。

「えつと盾の勇者様、私の名前はマインⅡスフィアと申します、これからよろしくね」

「あ、ああ……よろしく」

あんな出来事があつたのにもかかわらず、何事もなかったように自己紹介をはじめマインに警戒を覚えつつ返事をする

「よし、じゃあ行くぞマイン」

「はいー」

マインは元気な返事をして俺の後ろをついて来た

城と町をつなぐ跳ね橋を渡ると、そこは見慣れた町が広がっていた。お、あの家は盗賊プレイ御用達の「なぜか鍵が閉まってない家」じゃないですか、お世話になりました。

「これからどうします？」

「きまつてんだろ、まずはお前の武器を買うぞ」

盾しか持つことができない俺に武器屋は不要、だが同行者のマインは武器縛りをする

わけじゃないからな、まずは武器だ

「じゃあまずは武器屋ですね、いい店を知ってますよ?」

「いや、大丈夫だ俺についてこい」

「はい?」

不思議そうな顔をするマインを尻目に俺が向かったのは、町のはずれにある墓地

「ここだ」

「えつと……盾の勇者様?ここに何かあるんですか?」

「見てればわかる」

RTAやるならだれもが足を運ぶ場所、それがこの「町はずれの墓地」だ、寂れては居るがよく見ると一つだけ真新しい墓石がある

「あつたあつた、この墓石だ」

「この墓石がどうしたんですか?見たところ名前も書かれてませんが……」

「よく見てるな、この墓石はな昔とある鍛冶師が王家に隠れて武器を作るのに利用していたんだ」

「そんなものがここに……つてそれ私に言っていいますか?」

「ああ、いいとも。なぜならここはな、盾の勇者でしか開けられないようにできているからだ」

素晴らしいながら足元に落ちている白い石を拾い、盾の勇者のマークを描く
すると墓石がひとりでに動き始め、その下から階段が現れる

「よし、じゃあいくぞ」

「うわあ……」

若干引いてるマインを連れて長い階段を下り続ける。暫くすると明かりが見えてくる

「へえ、やっぱこの蠟燭はまだついてるのか」

「な、なんで明かりがついてるんですか？」

「この蠟燭の正式な名前は魔導蠟燭と言ってな、周囲の魔力を燃料に明かりを灯すんだ。さ、着いたぞここがかつて最も有名だった鍛冶師であり、王家に叛逆したが故に歴史から名を消された鍛冶師の工房だ」

長く続く階段の先、これまた長い廊下のその先にある大扉の前に着いた

俺はその大扉に手を当て、力強く『持ち上げた』

一見両開きに見える大扉が上に行ったことに声を無くしたマインだが、次に見た扉の奥の光景に腰を抜かした

「な、なんですか……この武器の墓場みたいなところは」

「いい表現だ、そうだまさしくここがありとあらゆる武器の頂点の集積地で、墓場だ。こ

ここにある武器は全て世に出すことを拒まれ、今もなお封じられている。さあマイン、目の前に大量の武器があるじやろ？好きなもんもってけ」

「え!?!いいんですか!?!」

「おう構わん、どうせ誰かが持つて行かなきゃこのまま錆びて死んでくんだ、だったら誰かに使われた方がいいだろ」

きにすんなど言う俺に対し、マインは驚きながら武器たちを眺めること数分、気に入った武器を見つけたのか、一本の剣を台座から引き抜いた

「決まったか」

「はい、この子に決めました」

「それはよかった、大事に使えよ?」

俺が丹精込めて作った

この世に一本しかない魔剣だからな

廃人の世界

マインの装備を整え、城門を抜けると見渡す限り草原が続いていた。

一応石畳の道があるが一歩街道から外れると何処までも草原が続いていると思うくらいに緑で覆いつくされている。

ゲームでは自然の匂いや風に吹かれて揺れる草木のモーションなどはカットされていたからな、やはり現実の自然はいいものだ

「では勇者様、このあたりに生息する弱い魔物を相手にウォーミングアップを測りましょうか」

「そうだな、マインの実力次第でレベリング場所が変わるからな、ここらの魔物なら子供でもボコれる」

「え？勇者様が戦うんじゃないんですか？」

「いや、俺の場合火力高すぎてここで戦ったら周りの土地が禿げる」

「そ、そうですか……」

一本街道にそって歩きながらマインと会話をしているが、マインは既に試験が始まっ

ているのに気が付いていないようだ。

……少し教えてみるか

「……さて、マイン」

「はい？どうかしましたか？」

「今ちよつとこの一本街道に非殺傷性の地雷をいくつか埋めてみたんだが……いまからその地雷に引つかからないようにして町まで戻ってみる」

「え？え?!いつ仕掛けたんですか？というか地雷つて!？」

「ん？地雷を知らないのか？いいか、マイン地雷つていうのはだな、廃人プレイヤー御用達の護身用罠の一つでな？地面に埋めて使うんだ」

「地面に……つてことは後ろの道に埋まっているんですか!？」

「ああそうだ、ついでに言うところから町まで約700mで、地雷は大体20?30個程埋めた」

「地雷に引つかかるとどうなるんです？」

「普通なら四肢が挽げる程の威力だが、今回は非殺傷性の奴だからただ上に吹っ飛ぶだけだ」

実は埋め方を調整して飛んだ先にちょうど地雷が来るようにしているが言わなくていいだろう

「ほらさっさと逝ってこい、安心しろ魔物はまず寄ってこない」
「わ、わかりました」

少し怯えながらマインが勇気を出して一歩前に踏み出し……見事に地雷を踏み抜いて町まで強制的に飛んで行った

「まだまだだな、廃人なら飛びながら錐揉み回転してポージングするっていうのに」

情けない声を上げながら飛んでいくマインを見ながら通ったばっかの道に戻った

暫く歩いていると、遠くで錬が戦っているのが見えた、あれは……最弱の魔物として有名なオレンジバルーンか、廃人プレイヤーならアクセサリ扱いされるくらいには弱い。

因みにオレンジバルーンを死なさずに長時間戦闘をこなせるかで廃人具合が決まる

そう考えてるうちに錬はオレンジバルーンへと走り出し、少し近すぎるくらいで剣を振り始め、3体のオレンジバルーンを一撃で薙ぎ払った

遅すぎる、剣の廃人なら一突きで20体は屠れるぞ……！しかも剣先もブレッツブレであれじゃあ別方向から力を加えられたらすぐに負けるぞ？

(廃人にとって)あまりにも弱すぎる事に驚愕しながら歩いていると、一本街道の先からマインが息を切らせながら走ってきた、

その後ろに明らかにこんな平原に出るはずのないオオトカゲを連れて

「勇者様ー！逃げてくださーい！」

「あれはレッサードレイクか？こんなところに出るはずがないのに……縄張り争いに負けて追いつけられなかった個体か？」

マインの声を半ば無視していると、すぐさまマインが横を通り過ぎ、目の前には食べると言わんばかりに大口を開けるレッサードレイクがいたので

下顎を蹴り上げることで強制的に閉じさせ、すぐさま上に飛んで上顎をつかみそのまま地面にめり込ませた

「雑魚が、彼我の差をよく考えないで喧嘩売るから縄張りを追い出されるんだぞ」

頭を地面にめり込ませて気を失ったレッサードレイクをそのままに踵を返し、遠くから見ていたマインに声をかけた

「おいマイン！この程度のトカゲ擬きに何逃げてんだ！」

「いやそれドレイクですよね!?普通死にますよね!？」

ん？こいつもしかしてトレインしてきたのか？

ほっほうどうやら直接鍛えられたいようだな

「ほらマイン、こっちはもう安全だからこっち来い。レベリングはしばらくお預けだ」
「レベリング…？いやそれよりまだ死んでませんよね？」

「それなら大丈夫だ、この手の魔物は 縄張り争いに負けた個体だからこっちが強いと分かればそのまま帰ってくさ」

そういいながらレッツサードレイクに目を向けると目を覚ましたのかレッツサードレイクが地面に埋まった頭を抜こうと四苦八苦しているのが見える

「それより町に戻るぞ、そこでお前を少し鍛えるから」

「町に演習場ってありましたっけ？」

「あるぞ、知ってる奴なんかほとんどのいないが」

そういつて俺たちは一日目のレベリングを切り上げ、城下町へと戻るのだった

「……：そういえばマインの防具買うの忘れてたな」

「えっ今気づいたんですか？」

重要なことを忘れていた俺に心外と言った顔で告げるマイン

「仕方ない、マイン防具買いに行くぞ」

「わかりました！じゃあ今朝方紹介しそびれた場所に案内しますね！」

そういつてスキップするような歩調で案内したのは、武器屋

「マイン、ここ武器屋にしか見えないんだが？」

「大丈夫ですよ、ちゃんと防具も扱ってます」

マインの言葉に頷きながら店の内装を除くと……あつた、確かに防具も扱っている
「いらつしやい」

店に入ると店主き元気よく話しかけられる、筋骨隆々のまさしく絵に描いた武器屋の
店主と言った人物がカウンターに立っている。

世の中にはまるでオークを数倍ひどくした外見の人物が武器屋やつてたりするから
ここは当たりのようだ

「お、お客さん初めてだね。当店にはいるたあ目の付け所が違うね」

そりや時たま眼球が虚空飛び始めるくらいには違うね

「ああ、彼女に紹介されてな」

そういつてマインを指差すと、マインは手を上げて軽く手を振る

「ありがとうよお嬢ちゃん」

「いえいえここら辺りじゃ親父さんの店つて有名だし」

「うれしいこといつてくれるねえ。ところでその変わった服装の彼氏は何者だい？」

ああ、そういえば今の服装はあつちの世界の服装だったな

これじゃあ異世界人ですよと言つてるようなものだ、あとで買えとかなきや

「親父さんもわかるでしょ？」

「つてことは勇者様かい！へー勇者様が四人もこの店に来てくれるたあ運がいいな、俺は！」

へえ錬達もこの店寄つたのか、しかしこの親父まじまじと俺のことみてくるな……

「あんまり強そうには見えねえな」

「人は見かけによらないって言いますよ」

「それもそうか！」

そういうながら笑う親父は裏表のない見ていて気持ちのいい人だ

廃人になると笑う＝戦うだからなあ……

「つと、そうだった俺の名前は岩谷尚文だ、盾の勇者をやらせてもらってる。今後とも利用するからよろしく頼む」

自己紹介、大切。廃人相手に自己紹介忘れると言うまでリススキルしに来るからな

「ナオフミ殿ね、お得意様になってくれるのならいい話だ、よろしく！」

元気な店主だこと

「ねえ親父さん、何かいい装備ない？あ、武器はもうあるから防具がほしいんだけど」
するとさつきまで防具を眺めていたマインが親父さんに上目遣いで尋ねる

「そうだなあ……予算はどのくらいだ？」

「銀貨500枚までなら出せるぜ？」

最初の町とは言え城下町だからな、少し多めに予算出した方がいいだろう

「となると……あそこの奴がちょうどいいんじゃないか？」

そういつて親父が指した方向にあったのは……フルプレートへのビーアーマー

「マイン、あれで飛んだり跳ねたりできるか？」

「いや無理ですよ……え？まさかやれなんて言いませんよね？」

はっはっは、まさか（目逸らし）

「いや冗談だ、親父。他にいい防具は？」

「それなら確か……これがあつたな」

親父に他にないか聞くとカウンターの奥に行つてすぐに戻つてきた、手にもっているのは……見たところ銀鉄の鎖帷子か。さて……性能の方はどうだ？

銀鉄の鎖帷子 防御アップ（中） 斬撃耐性 刺突耐性

うーんいまいち、まあ最初の町だからこんなもんか

「それで値段なんだが……おまけして600枚だな」

……!?あれで金貨600枚!?

「……銀貨ですからね？」

驚いたのが伝わったのかマインが小声で教えてくれた、ああびつくりしたなんだ銀貨か

「じゃあそれで」

「まいど！ ついでに中着をおまけしておくぜ！」

「この親父さっきの冗談（勝手に勘違いしただけ）と言っておまけと言いいい良い店主だわ

「ここできていくか？」

「はい！」

「ん？ 坊主の方じゃねえのか？」

あ、こんなところで食い違ってたのか

「まあ一応盾の勇者だからな、防御は高いんだ、んで今回はマインの装備をかいにきたんだ」

「なんでえ坊主が買うんじゃないのか」

「支払いは俺だからある意味俺が買ってる」

代金を払い、マインが鎖帷子をもって更衣室に入り、しばらく待つと更衣室が開き鎖帷子を着たマインが出てきた

「だいぶ似合ってるな」

「ありがとうございますー！」

マインの防具を買い、店を出ると、日もだいぶ傾いていたので、近くの宿に寄った。ふむ一部屋30銅貨か、安いな

「二部屋で」

「わかりました」

宿屋の店主が揉み手をしながら俺達が泊まる部屋を教えてくれる。

プレイヤーが経営する宿屋よりだいぶ安いことを気にしながら、宿屋に並列してある酒場で食事をとり。

何事もなく宿に戻り就寝した

裏切りの対価

就寝の儀式を終え（乱数調整）就寝に入った頃、ガチャリと扉が勝手に開いた

案の定泥棒に入られたこと思いながら薄目に犯人を確認すると、マインが扉から入ってきた。マインはこちらが眠っていることを確認すると、備え付けの机の上にオセロのように並べられている金貨をすべてかき集める

その際に音が少しなり、慌ててこちらを見るが俺が狸寝入りしているのを寝ていると勘違いしたのか、ほっと息をついて再び集め始めた

金貨を集め終わった後、薄暗い部屋を見渡して何も盗るものがないのを確認するとそのまま扉から出て行った

乱数調整のためのお金をすべて持つていかれたため、起きて再度同じ儀式をした後、俺はそのまま就寝した

翌朝、ドアをドンドンと叩く音に目を覚ます。睡眠妨害で消し飛ばすぞ……

念の為装備を変え、見た目を変えた後ドアをたたく音をして二度寝しようとする、ドアが蹴破られ数人の衛兵が入ってきた

「盾の勇者だな！」

「違います、あと眠いんで出て行ってください」

「そ、そうか！すまない！」

そういうと衛兵は他の兵士を連れて他の部屋へと向かった

よし、逃げるか。後マインには誰を敵に回したかしっかりと教えておこう

そうと決めると俺は窓から身を乗り出し、そのまま屋根へ上った。下から騙されたことに気が付いた衛兵が再び部屋に入る音が聞こえたが俺はそのまま王城へ向かった

屋根伝いに跳ね橋まで行き城門の前に降りると衛兵に囲まれた

「盾の勇者……だよな!？」

「なんで疑問形……？あ、そうか」

見た目変えたまんまだったな

「これでいいか？」

「王様から招集命令が下った、ご同行願おう」

「ああ、かまわない」

特に反抗する理由もないので従い、数人の衛兵に囲まれた状態で城へ入って行く。暫く歩き調見の間に案内されると、そこには不機嫌な顔をした大臣と王様。

そして案の定

「やつぱりここにいたか、マイン」

鍊と元康に樹、その他の仲間が集まっていた

そしてマインに声をかけると、元康の後ろに隠れてこちらを睨んだ

「……なるほど」

まるで四聖オンラインで魔王ルート終盤のようだ、まあその時に比べれば人数も視線の圧も米粒のようだ

「とりあえず、どうなっているのか聞こうか」

「ほんとうに身に覚えがないのか？」

元康が仁王立ちで俺に詰問してくる。……少し圧を飛ばしてみた

少し怯えて震えたがより一層強い視線を飛ばしてくるようになった

「なにもないな」

金貨の事を出そうと思ったが元康たちは俺が金を持っているの知らないのと言わなかった

「お前、まさかこんな外道だったとは思いませんでしたぞー」

「外道？何のことだ（震え声）」

俺の返答に、謁見の間は裁判所のような雰囲気醸し出した

いや違うんだ、あれはレベリングの一環でな？

「して、盾の勇者の罪状は？」

「罪状？なんのことだ」

「うぐ……ひぐ……盾の勇者様はお酒に酔った勢いで突然、私の部屋に入って来たと思っただけ押し倒してきて」

「は？」

「こちとらスピリタス直飲みでも平常心保てるくらいには酒は強いんだが？」

「盾の勇者様は「まだ夜は明けてねえぜ」と言っただけに迫り、無理やり服を脱がそうとして」

「おいおいおいおい」「まだ夜は明けてねえぜ」とか俺の腹筋にダメージ与えてくるんじゃないよ。もつと他にいい言葉あつただろうに

笑いをこらえる俺を他所にマインは泣きながら俺を指差して弾劾する。

「私、怖くなつて……叫び声をあげながら命からがら部屋を出てモトヤス様に助けを求めたんです」

「何？」

耐久高めの盾につかまれているのにどうやって振り払ったんだ？あれ下手なSTR特化でも逃げる事すら不可能なのに

そもそもマインは昨晚俺の部屋から捧げものを盗んだだろう

泣きじやくるマインに疑問しかない

「何言ってるんだ？ 昨晚食事した後そのまま寝たぞ」

「嘘つきやがって、じゃあなんでマインはこんなに泣いているんだ？」

「逆に聞くがなぜおまえがマインをかばう？ 昨日会ったばかりだろう？」

「泣いてる女の子を助けるのは普通だろう！」

へー、どうやらそっちは温室育ちのようだなこっちは泣いてる女の子は十中八九外道RP廃人の被害者で近づくトリスポンするはめになるんだが

……だめだな、元康は完全にマイン側だし、王様に……あつ（察し

「王様！」

「黙れ外道！」

何も言っていないやん……

「嫌がる我が国民に性行為を強要するとは許されざる蛮行、勇者でなければ即刻処刑物だ！」

「何を言ってるんだお前は、高耐久の盾を処刑とかほぼほ不可能だぞ」

ほぼカイ○ウ状態だぞ

しかし厄介なことになったな、王様がこんなんじやほぼ俺が黒のようなものだ。

マインにめを向けると誰からも見られていないと踏んだのか、マインは俺にあつかんべーをしてくる

あらかわいい

「んで？俺はどうしたらいい？謝罪でもすればいいのか？ん？」

「この強姦魔が！」

どうやら元康の中では俺は強姦魔らしい、失敬な俺はただちよつと魔王魔王してるだけの筆頭廃人なのに

「異世界にきてまで仲間にそんなことするなんて屑だな」

「そうですね、僕も同情の余地はないと思います」

樹と錬が俺を断罪するのに戸惑いが無い、いいぞそれがもつと早くできれば入門廃人だ

「で？そつちとしてもこんな勇者を野放しにするわけにもいかないだろう？さあさつさと元の世界に返せ」

まったくなんでこんな廃人にもなれない奴らと一緒に世界救わなきやいけないんだ

……今思うと腹立ってきたな

「都合が悪くなったら逃げるのか？ 最低だな」

「そうですね、自分の責務をちゃんと果たさず、女性と無理やり関係を結ぼうとは……」
「帰れ帰れ！ こんなことする奴を勇者仲間にしてられねえ！」

錬たちの言葉に思わず殺気を放った。逃げる？ 失礼な、逃げるくらいなら貴様らもろとも爆発四散してやるわ

俺の殺気に錬達は一瞬呼吸が止まったがすぐさま敵意を向けてきた

「さあ、さっさと元の世界に返してもらおうか？」

すると王様は腕を組んで唸った

「こんな事をする勇者など即刻送還したい所だが、方法が無い。再召喚するには全ての勇者が死亡した時のみだと研究者は語っておる」

「……な、んだって」

「そんな……」

「う、嘘だろ……」

衝撃の事実が流れ弾となって三人を襲う！

そういえば元の世界に帰れないは召喚もののテンプレだったな

「帰れないとな？」

つまり俺は四聖オンラインを二度とできない？

ふざけるな

「おい、いつまでつかんでるんだ？」

俺は自身を拘束している騎士を力任せに吹き飛ばす

飛んで行った騎士はそのまま別の騎士を巻き込んで壁にぶつかって止まった

「き、貴様！抵抗する気か！」

「邪魔」

殴りかかってきた騎士の顔を掴み、そのまま床に叩き付けると床に大きく罅が入った
「で？王様、俺に対する罰はなんだ？」

二人の騎士を瞬く間に沈めたことに驚いていたのか、俺の言葉にはっとした表情で答える

「……今のところ、波に対する対抗手段として存在しておるから罪は無い。だが……既にお前の罪は国民に知れ渡っている。それが罰だ。我が国で雇用職に就けると思うな
よ」

「そうか」

随分とまあ甘いことだ

「1ヵ月後の波には召集する。例え罪人でも貴様は盾の勇者なのだ。役目から逃れられん」

「忠告どうも。あああとマイン、武器はくれてやる、安心しろ。手放しても戻ってくる」

そう告げるとどこからともなく剣が飛んできてマインの横に突き立った

驚いたまま固まる錬たちを無視して俺は城から出た

城から出ると住民達が俺の方を見てひそひそと小声で会話している

やはり噂の周りが早いのはどの世界も一緒だな

あれから一週間、城から離れた場所を拠点に俺は四聖オンラインにはなかった素材を集めていた。

拠点の場所は一見ただの大きな岩だが、足元に落ちている白い石で盾の模様を描くと岩の一部が動き出し、前に見た長い階段が現れた。

実を言うところの拠点は四聖オンラインで野宿を多用するプレイヤー向けに配られたものだ、取得方法は非常に難しく野宿をリアルで1年続けて、その間他のプレイヤーの襲撃を100回退けるというものだ。

廃人鯖じや野宿を襲うプレイヤーは効率がいいのが理由でかなり多いその為このアイテムを持つているプレイヤーはほとんどが上位廃人だ

階段を下り、長い廊下を渡り一番奥の扉の中に入り、今日の収穫物を下す

今回収できたのは主に魔物の臓腑、こういったアイテムは四聖オンラインではアイテム化しなかったのてつい集めてしまった

そして誰かに見られるわけでもないので装備の見た目を元に戻している

偶に城下町に戻って情報収集をしているが特に変わった様子はない、むしろ俺が死んだのではないかという噂が聞こえてくるくらいだ

戻るのそれだけじゃない、俺はとある人物を探している

見た目はめちやくちや肥満体の紳士だ、トゥルーエンドに必要な人物で、さらに四聖オンライン盾ルート屈指のヒロインであるラフタリアと出会うために必要な人材だ

しかしどこを探しても見つからず今日もまた見つからなかった

拠点に戻ってもやることは多い、波に備えて装備を整えるためだ。

最初の波で全力を出すほど初心者ではないし、しかし今の装備ではオーバークイルなの

で手加減用の装備を作っている。

……魔物の臓腑を材料に

今回作るのは胸当てと腰当

炉に火を入れ十分な熱量になるまで素材にする金属を用意する

今回用意するのは鋼を作る際に砕いた骨を混ぜ込んだ鋼だ、魔物の骨を使ったため普通の鋼より硬く魔力の通しがいいのが特徴だ

暫く待つて炉から十分な熱量が放射されたためそこに鋼を直接入れる、

あまり長く入れると溶けて炉の一部になるのですぐに抜き、ハンマーで叩き、薄く延ばす

が、面倒なので固めて専用のバケツに入れて炉に放つて少し待つて出すと、バケツの中には液体となった鋼が出来た

そしてそれをあらかじめ用意していた型に流し込み暫く待つて型から取り出すと、胸当ての完成……予想以上の重さだ

さて、鑑定だ

魔導鋼の胸当て（粗悪） 防御DOWN（極） 移動速度DOWN（極） 常時MP5%

消費 常時HP5%消費 被ダメージ倍増

THE・クソ☆

まあ手順全部端折ればそうなるな

まあステータス差的にこのくらいいしないと駄目だろう

次だ次

略

魔導鋼の腰当て（最高） 防御UP（上） 移動速度UP（上） オートヒール（中）

被ダメージ無効（稀）

ゴミ漁りしてたら埋蔵金つけた気分だわ

え？何……え？

被ダメージ無効？何それ？チート？え、（稀）って書いてあるけど上位廃人からしたら100%と同じだよ？

うっそだろ向こうでも良くて9割減が限界なのに無効って……

ええい封印だ封印！次！

略

魔導鋼の腰当て（粗悪） 防御DOWN（上） 移動速度DOWN（上）

ふむ、付与効果は無しか、よし今日はこのくらいだな

しかし人手がほしいな、素材集めと装備作成と食事といろいろやるには一人じゃ少し手が足りない……：奴隷市場ってあったかな？

「お困りの様子ですな」

「わかるか？やることが多いとどうしても……」

!?

「どやってここに!？」

声のする方へ視線を向けるとそこには、シルクハットに似た帽子に、燕尾服を着たメチャクチャ肥満体のサングラスを着けた変な紳士がそこにいた

どうやってここに入った？

「扉開いたまんまですよっ？」

「あ」

やらかしたーそっういえばあれ自動で閉まらないんだった……

「ところで先ほど人手が足りない、とおっしゃいましたよね？」

「ああ、言ったが？」

「そんなあなたに良いお話が？」

「聞こう」

来た！探し人が向こうから来た！

興奮を抑えながらもつたいぶる紳士に続きを施す

「気になりますか？」

「とても気になる」

「ふふふ、いいですねえ、あなたの目。まるで魔王のようです」

「はよ」

「ええ、わかりました。今私があなたに提供するもの、それは」

そこで紳士は区切り息を吸ってシャウトする

「奴隷です！」

「おお！」

「どうです？」

「ちようどほしいと思っていたところだ」

にやりと笑う紳士につられて俺も無意識のうちに口角を上げていた

拠点から出て城下町へ戻り、大通りからそれと裏路地を歩くこと暫く

昼間だというのに日が当たらない道を進み、まるでサーカスのテントのような小屋が路地の一角に現れる。

「こちらです」

「おう」

奴隷商は不気味なステップで歩いていく。しかしスキップにしては跳躍距離が長い。儀式の一環か？

それから、奴隷商は予想通り、サーカステントの中へ俺を案内した。

「勇者を奴隷として欲しいと言うお客様はおりましたし、私も可能性の一つとして勇者様にお近付きしましたが、考えを改めましたよ。はい」

「ん？」

「あなたは良いお客になる資質をお持ちだ。良い意味でも悪い意味でも」

「どういう意味だ？」

「さてね。どういう意味でしょう」

ゲームでもであったがつかみどころのない人物だ、そう思っているとガチャン！

という音と共にサーカステントの中で嚴重に区切られた扉が開く。

「ほう……」

店内の照明は薄暗く、仄かに腐敗臭が立ち込めている。

獣のような匂いも強く、あまり環境が良くないのはすぐに分かった。

幾重にも檻が設置されていて、中には人型の影が蠢いている。

「さて、こちらが当店でオススメの奴隷です」

奴隷商が勧める檻に少しだけ近づいて中を確認する。

「グウウウウ……ガア！」

「……理性がないようだが？」

檻の中には明らかに発狂状態にある獣人が入っていた

「一応、人の分類に入ります」

「一応なのか……」

紳士の言葉に困惑していると、紳士は思い出したかのように言い出した

「因みに奴隷には」

パチンと奴隷商が指を鳴らす。すると奴隷商の腕に魔法陣が浮かび上がり、檻の中に居る狼男の胸に刻まれている魔法陣が光り輝いた。

「ガアアア！ キャインキャイン！」

狼男は胸を押さえて苦しみだしたかと思うと悶絶して転げまわる。

もう一度、奴隷商がパチンと鳴らすと狼男の胸に輝く魔法陣は輝きを弱めて消えた。

「このように指示一つで罰を与えることが可能なのですよ」

「便利な魔法だな」

「これが四聖オンラインにあったらあの廃人共をおとなしくできるだろうか、いや無理だな

「俺も使えるのか？」

「ええ、何も指を鳴らさなくても条件を色々と設定できますよ。ステータス魔法に組み込むことも可能です」

「ほお……」

中々便利な設計をしているじゃないか。廃人共に通用しないのが残念だ

「一応、奴隷に刻む文様にお客様の生体情報を覚えさせる儀式が必要でございますがね」

「奴隷の飼主同士の命令の混濁が無いために、か？」

「物分りが良くて何よりです」

ニイ……つと奴隷商は不気味に笑う。

おもしろい奴だ。

「参考までにこの奴隷のステータスはコレでございますよ」

小さな水晶を奴隷商は俺に見せる。するとアイコンが光り、文字が浮かび上がる。

戦闘奴隷Lv75 種族 狼人

ふむ、高い……のか？ いや奴隷にしては高いな、こればかりはプレイヤー経営がでないからわからないが廃人式レベリングにぎりぎり合格と言ったところか

「コロシウムで戦っていた奴隷なのでしたがね。足と腕を悪くしてしましまして、処分された者を拾い上げたのですよ」

「ふむ……」

腕と足を悪くした……か、あの腰当てさせてみるか？

いや違う今回の目的は此奴じゃない目的を思い出せ、俺

「さて、一番の商品は見てもらいました。お客様はどのような奴隷がお好みで？」

「安い奴でまだ壊れていないのが良いな」

「となると戦闘向きや肉体労働向きではなくなりますか？ 噂では……」

「その情報は被害者が撒いた嘘だ」

「ふふふ、私としてはどちらでも良いのです、ではどのような奴隷がお好みですか？」

「変に家庭向きも困る。性奴隷なんて持ってた他だ」

俺が今ほしいのはラフタリアだ、ラフタリアだせやおら

「性別は？」

「女だ、男だと素材集めの時に素材を痛めそうだからな」

「ふむ……」

紳士は頬をポリポリとかく

「些か愛玩用にも劣りますがよろしいので？」

「見た目を気にしてどうする」

「Lvも低いですよ？」

「その程度誤差だ」

「……面白い返答ですな。あんなことがありましたのに」

「奴隷は人じゃないんだろ？物を育てるなら盾と変わらない。裏切らないのなら育てるや」

「これはしてやられましたな」

クツクツクと奴隷商は何やら笑いを堪えている。

「ではこちらです」

そのまま、檻がずつと続く小屋の中を歩かされること数分。

ギヤーギヤーと騒がしい区域を抜けると、今度はビービーとうるさくなってきた。

不意に視線を向けると小汚い子供や老人の亜人が檻で暗い顔をしている。

そしてしばらく歩いた先で奴隷商は足を止めた。

「ここが勇者様に提供できる最低ラインの奴隷ですな」

そうして指差したのは三つの檻だった。

一つ目は片腕が変な方向に曲がっているウサギのような耳を生やした男。見た限り

の年齢は20歳前後。

二つ目はラフタリア

三つ目は妙に殺気を放つ、目が逝っているリザードマンだ。ただ、なんかリザードマンにしては人に近い気がする。

「左から遺伝病のラビット種、パニックと病を患ったラクーン種、雑種のリザードマンです」

なるほど、三つ目は雑種、混血か。

「どれも問題を抱えている奴ばかりだな」

「ご使命のボーダーを満たせる範囲だとここが限界ですな。これより低くなると、正直……」

チラリと奥のほうに目を向ける奴隷商。俺も視線を向ける。遠目でも分かる、死の臭い。

葬式で微かに臭う、あの臭いの濃度が濃い。あの先には何かが充満している。なんとなく腐敗臭もしてきている。

まるでガチャで爆死した友人たちが放つ瘴気みたいだ

「ちなみに値段は？」

「左から銀貨25枚、30枚、40枚となっております」

「ふむ、Lvは？」

「5、1、8ですね」

ふむ、変わらないな

「そういえば、ここの奴隷はみんな静かだな」

「騒いだら罰を与えます故」

「なるほど」

しっけは出来ているのか、もしくはしっけが出来ない奴隷を俺には見せていないか。

「じゃあ真ん中の奴隷を買おうでしょう」

「なんとも邪悪な笑みに私も大満足でございますよ」

奴隷商は檻の鍵を取り出してラクーン種の女の子を檻から出して首輪に繋ぐ。

「ヒイ!？」

その反応は死ねる

四聖オンライン屈指のヒロインを怯えさせたとなつては廃人共にゴコられてしまう、
まとめて薙ぎ払うが

怖がらせないように笑つたんだが怯えられてしまった

それから鎖で繋がれた女の子を連れて、元来た道に戻り、少し開けたサーカステント
内の場所で奴隷商は人を呼び、インクの入った壺を持つてこさせる。

そして小皿にインクを移したかと思うと俺に向けて差し出す。

「さあ勇者様、少量の血をお分けください。そうすれば奴隷登録は終了し、この奴隷は勇
者様の物です」

「なるほどね」

俺は採取用のナイフを自分の指に軽く突き立てる。

血が滲むのを待ち、小皿にあるインクに数滴落とす。

紳士はインクを筆で吸い取り、女の子が羽織っていた布を部下に引き剥がさせて、胸
に刻まれている奴隷の文様に塗りたくる。

「キヤ、キヤアアアアアアアア……!」

奴隸の文様は光り輝き、俺のステータス魔法にアイコンが点灯する。

奴隸を獲得しました。

使役による条件設定を開示します。

ズラーつと色々と条件が載っている。

俺はざつと目を通し、寝込みに襲い掛かるや、主の命令を拒否するなどの違反をした場合、激痛で苦しむように設定する。

ついでに同行者設定というアイコンが奴隸項目以外の所で目に入ったのでチェックを入れる。

奴隸A、名前が分からないからこう書かれている。

どうやら任意で条件を変更できるようだから、後で細かく指示するでしょう。

「これでこの奴隸は勇者様の物です。では料金を」

「ああ」

俺は奴隸商に銀貨31枚渡す。

「1枚、多いですよ?」

「この手続きに対する手数料だ。搾り取るつもりだったんだろう?」

「……よくお分かりで」

先に払いましたという顔をすればあちらも文句は言い辛い。

これで尚、俺から筆取り取るつもりなのなら……どうしたものか。

「まあ、良いでしょう。こちらも不良在庫の処分が出来ました故」

「ちなみに、あの手続きはどれくらいなんだ？」

「ふふ、込みでの料金ですよ」

「どうだかな」

奴隷商が笑うので俺は笑い返してやった。

「本当に食えないお方だ。ぞくぞくしてきましたよ」

「ははは、面白いことを言うな」

「ではまたのご来店をお楽しみにしています」

「ああ」

俺はよろよろと歩く奴隷に来るように命令してサーカステントを後にする。

暗い面持ちで奴隷は俺の後を着いて来る。

しかしあまりにも遅いので俺はラフタリアを抱き上げ路地裏の壁を上り、屋根伝いに城下町を後にした

お子様ランチの刃

ラフタリアを抱えながら町を出て拠点に戻り、俺は前にマインを連れて行った部屋へラフタリアを連れて入る

「なあラフ……お前、名前は？」

「……コホ」

顔をそらして返答を拒否する

まあ名前知ってるから聞かなくてもいいんだけどこんなパンプキン頭がいきなり教えてもない自分の名前を言ってきたら恐怖しかない

まあいいや、紳士から聞いたとしても言っておこう

「はあ、できればお前の口から言っただけがな……じゃあラフタリア」

「……!?」

やはり驚いているか

「名前なら事前に紳士から聞いている」

「紳士……？」

「まあそんなことよりだ、ラフタリアそこに沢山の武器があるだろう？その中から気に

入ったものを一つくれてやる、護身用だ」

「……」

ラフタリアは目の前にある武器の山を眺め、一番奥に保管されている刀を手に取った
「それでいいか？」

「……」

刀を手に取ったラフタリアはどこか満足げな顔で頷いた

そんなかわい顔を見てリアクションをとれない現状が恨めしい……

さて、武器は渡した。次は防具だ

「よしラフタリア、ついてこい」

「……」

よろよろと歩くラフタリアに合わせてながら歩き、工房へ向かう

しかしよく見ると小汚いな……後で風呂に入れるか、後は食事だ

「ほら、お前の防具だ受け取れ、あと更衣室はここだ」

そういつて防具一式（最高品質）を渡し、ラフタリアを更衣室に押し込んだ

少し咳が聞こえるがその後更衣室の扉が開き装備を整えたラフタリアが出てきた

「よし、じゃあまずラフタリア、装備整えさせたところ悪いがお前にやつてもらったのは戦闘
じゃない」

そう伝えるとラフタリアはどう勘違いしたのかL V Iとは思えない速度で抜刀したあ、まてラフタリアそれ構えないでその武器そこらの廃人を一撫ででやれる武器で俺でもABONしちゃう奴だから

「ああ待てラフタリア、そう意味じゃない。お前には採取を主にやってもらう」

「……？」

詳しい説明をするとラフタリアは不思議そうに首をかしげながら流れるような動作で納刀した

お前どこでそんな抜刀術覚えてきたよ

「まあ今日はもう遅い、食事にするぞ」

「……コホコホ」

軽く咳をしながら頷くラフタリアを連れて工房を出て別の部屋に入る

工房の部屋の正面右にある壁を押すと壁がひとりでに動き、その奥に少し広めの部屋が現れた

部屋の中央には十人くらいで食事をとれるテーブルと椅子があり、テーブルの上には埋め尽くさんばかりの料理が置いてある

全部俺が作ったものだ

「なん、で？」

「ん?」

ラフタリアの声が聞こえたので視線を下げる。

するとラフタリアは不思議そうな顔で俺を見つめていた。

「俺が食わせたかったからだ、食えないのでもあったか?」

ラフタリアはブンブンと頭を横に振る。

微妙にフケが飛ぶな。

「なん、で、食べさせてくれるの?」

「だから言ってるだろ、俺が食わせたかったからだ」

「でも……」

何をそんなに意固地になっているのか。

「とにかく飯を食って栄養をつけろ。そんなに痩せていちやあいざというとき動けないぞ? さあ、椅子に座れそして飯を食え。一人で食う飯ほど寂しいものはないんだ」

そういつて俺はラフタリアを椅子に座らせてスプーンを握らせ、すぐ横の椅子に座り目の前にある炒飯（旗付き）をラフタリアの目の前に置き自分の飯（スターゲイジーパイ・アレンジ）に手を伸ばす。うん。うまい。

「……」

ラフタリアが炒飯（旗付き）を凝視しながら固まっている。

「どうした？嫌いだっただか？」

「……いいの？」

「ああ……かまわんさ、作った俺が良いと言ったんだ、遠慮せず食べ。冷めたら味が落ちる」

俺の言葉にラフタリアの顔が少し歪む

……え？嫌いなもの入ってた？

「うん」

別方向に心配する俺を他所にラフタリアはスプーンをもって炒飯（旗付き）を食べる。

こうして作った食べ物が誰かに食べてもらえる事が嬉しいのはどの世界でも変わらないな。

ラフタリアは炒飯に刺さっていた旗を大事そうに握りながら、もぐもぐと一心不乱に食べ続ける

俺はそれを眺めながら今後のことを考え、再び自分のスターゲイジーパイ・アレンジを食べ始めた

食事を終え、ラフタリアを風呂に入れた後、儀式就寝した翌朝。素材集めとラフタリアのお勉強のため拠点を出て、草原に出る。

道中ラフタリアは機嫌がいいのか鼻歌を歌っていた。

が、草原に出るや否や、武人の如き目つきになり周囲を警戒し始める

ええ……

「その様子だと、素材集め中に魔物に襲われても大丈夫そうだな」

俺の言葉にラフタリアは静かに頷く

「と言ってもこの辺じゃ雑魚しかわからないからな、正直オーバーキルなくらいだ」

そういつてある方向を見ると、レッドバルーンがこちらに近づいて来た

「……オーバー……キル？」

「そうだ」

「そう……」

「まああのくらいなら今のラフタリアでもやれるだろう」

「……私でも?」

「ああ、俺もラフタリアぐらいの時は既にドラゴンを討伐していた、だから大丈夫だ。お前を信じる俺を信じろ」

そういうとラフタリアはやる気を出したのか、レッドバルーンの方へ走り出し、横をすり抜けると同時に一閃。それは見事なものでレッドバルーンが死んでいることに気づいていない。

レッドバルーンが振り向いてラフタリアに噛みつきこうとするが、ラフタリアが納刀の時に音を鳴らす。その瞬間レッドバルーンの身体が切り刻まれた。

あれは……いやまさか

「ご主人様……その、この剣は……?」

自分がやったことに驚いたのかラフタリアが質問してくる

「それは昔……俺が一から鍛え上げた唯一無二の刀だ」

「これを……?」

「ああ、そうだ凄いだろう?」

そういいながらも俺の手は軽く血が滲むほどに握られていた

あの時の運営だけは許さねえ……

ラフタリアが怯えた目をしたので話題を変えた

「とりあえず、今日はお前に薬草を摘んでもらう、摘み方はその都度俺が教えるから安心しろ」

「うん……」

多少慣れてきたのか、ラフタリアは素直に頷いた。

そうして薬草の種類と摘み方を教えながら草原を進んでいると、森からバルーン以外のモンスターが飛び出てきた

ルーマツシュ。

白い、動くキノコだった。何か目つきが鋭くて、大きさは人の頭くらい。

デコピンで消し飛んだので次からはラフタリアに倒させた

他に色違いのブルーマツシュなる敵とグリーンマツシュも居た。

一通り教えた後、日も傾いて来たので拠点に帰っていた

「コホ……」

ラフタリアは文句を言わずに俺に着いて来る。

やはり咳が気になるな……後で薬草から作った薬飲ませるか

「とりあえず風呂に入ってこい、ちゃんと頭と体洗うんだぞ」

「……うん」

そうしてラフタリアは浴室へ向かい、俺は薬を作るのに利用する薬室へ向かった
 草原でラフタリアがとった薬草は俺がとったものに比べやや質は落ちるが問題はな

い

薬研に薬草を入れ、すりつぶし細かく砕く

そして細かくした薬草を。盾に入れて製薬する

そしてしばらく待つと、盾から錠剤が出てきた

回復の錠剤 品質 やや良い しっかり製薬された錠剤、飲めば即座に傷を癒し、し

ばらくの間癒し続ける

んー、まあ回復薬でも症状は治るだろう、たぶん

暫く薬研の往復させる回数や、往復させるときの力加減を変えながら錠剤を作つてい
 ると、ドアが開きラフタリアが入ってきた

「温まったか？」

「うん……コホ」

………：ういえば紳士が病もちつていったな、だとすると風邪か？ 確かここら辺の棚
 に常備薬があつたな。

常備薬 品質 最高 それは万病を治す薬

「ほら、これ飲め」

そういつてラフタリアに薬を渡すが

「……苦いから、嫌……」

そういつて拒否するラフタリアに俺は別の常備薬を出した

常備薬(甘) 品質 良い 製薬時に蜂蜜を入れた常備薬、効能はやや落ちるが甘く子供でも飲める

「こつちのは少し品質は落ちるがおいしく飲めるぞ?ほら」

「は、はい……?」

おいしい薬というものに疑問を抱きながらラフタリアは一気に薬を飲み込む

「……おいしい」

「よしよし、いい子だ」

頭を撫でてやるとやはりラフタリアは不思議な表情で俺をぼんやりと見つめる。

あ、タヌキの耳はふかふかだ。

尻尾の方に目を移すと何をするのか察したのか、頬を染め、触らせないとばかりに尻尾を抱き締めて拒絶された。

「さ、晩飯にするぞ」

俺はそういつて食堂へ向かい、そのあとをラフタリアが付いて行った

食堂に着き、時計を見ると時間は既に21時を回っており少し時間かけ過ぎたかと後

悔しながら料理をする

やっぱ料理の時間が一番落ち着くな

「さ、できたぞ熱いから気を付けて食べよ?」

そういつて俺が出したのはルーマッシュの素材を入れたキノコグラタン、あつちと違つて過程を省略できるのはいいな

そのグラタンをラフタリアと俺の前に置き、スプーンをもつて食べ始める
……マツタケの味だこれ

食事を終えたラフタリアはウツラウツラと眠そうにしている

「寝てもいいんだぞ?」

片づけをしながら言う俺にラフタリアは首を何度も振る。

あれか? 寝たくない駄々を捏ねる子供みたいな……て、子供か。

そういえばパニック症も持ってたっけか?

「いや……助けて……」

ラフタリアが変な声を上げた。

お巡りさん俺だ。

内心ふざけながら見ると眠っているラフタリアがうなされている。

「いやああああああああああああああああああああああああああああああ！」

キーンと耳が遠くなるのを感じた。

「落ち着け、落ち着くんだ」

俺は夜泣きするラフタリアを抱え上げて、あやす。

「いやあ………さん。………さん」

親を呼んでいるのだろうか、ラフタリアはずっと涙を流して手を前に出して助けを求め。

「大丈夫………大丈夫だから」

頭を撫で、どうにかあやし続ける。

「泣くな。大丈夫だ、もう一人にはさせない」

「うう………」

泣き続けるラフタリアを抱き締める。

チュン………チュン！

「朝か」

いや、強敵でしたね。

ラフタリアの夜泣きは小さくなったのだけど。少しでも離れると、大声で泣くのだ。おかげでラフタリアを抱きしめながら寝る羽目になったよ

「ん……」

「おきたか？」

「ひい!？」

俺に抱き抱えられていたのに驚いてラフタリアは大きく目を見開く。

「はあ……疲れた」

時計を見るとまだ時間はある。今なら仮眠くらい取れるだろう。

「俺は少し寝るから、朝飯は……そのちよつと出っ張ってる扉の中に保存してる奴食べてくれ」

コクリとラフタリアは頷く。

「いい子だ、じゃお休み」

目を開けているのも苦痛の俺は直ぐに眠りの世界に誘われるのだった。

いやな夢だけは見たくないな

襲来

どこか見知らぬ場所に飛ばされる人たち。飛ばされた先は一面の焼け野原。古参と思われる人物ですら言葉を失うほどの光景に口を開く余裕さえなく、焼け野原の真ん中に佇む人影を見つめる。

人影に左腕はなく、右腕にボロボロになった盾を下げている。それを見て何人かがほっと息を吐いたがそれとは真逆に古参の人達はその体を震わせる。

「……ああ、まだ生き残りがいたのか」

ふと、その人影が呟く。言葉を聞くかぎり『生き残り』とは飛ばされてきた自分たちのことだろう。

「……まあいいか」

幽鬼のように歩を進める人影は一度そこで言葉を区切り、身を低く構え。「どうせみんないなくなる」

視界から消えた一瞬のうちに先頭にいた人達を吹き飛ばしながら呟いた。

「……フミ様……ナオフミ様」

目を開けると視界にラフタリアが映った、なんか大きくなつた？

「……どのくらい寝てた？」

「えと、一週間と少し」

目をこすりながら聞くとラフタリアは気まずそうに眼をそらしながら答えた

「……一週間と少し？」

「ちよつとまで、一週間と少し？え？一時間と少しじゃなくてか？」

「は、はい。とても安らかに寝ていました」

いや起こせよ

「はあ、起こせと言わなかった俺も悪かったが、さすがにな」

まったく、食糧とか素材とか腐ってないだろうな？

「あ、そうだなオオフミ様！龍刻の砂時計はもう見ましたか？」

「なんだそれは」

龍刻の砂時計？

「オオフミ様が寝てる間城下町へ行ったら時計塔のところにあつたのですが？」

「ああ、そういうえばなんかそんな感じの建物があつたな」

「それが龍刻の砂時計です、次の波の時間がわかるのでオオフミ様も見に行きましょう
！」

「そうだな」

何時何処に飛ばされるか分からないというのは俺からしても困る。

料理中に呼ばれたら地図を書き換えることになるかもしれない。

万全を期すために行ってみるとしよう。

城下町の中でも高低の高い位置に存在する時計台、近くで見れば見るほど大きな建物
だった。

なんとなく、教会のような面持ちのドーム上の建物の上に時計台がある。

入場は自由なのか、門が開かれ、中から人が出入りしている。

受付らしきシスター服の女性が見るなり驚いたような目をした。死んだのかと
思つたのだろう。

「盾の勇者様ですね」

「ああそうだ、時期がわからなければ対策出来ないからな」

「ではこちらへ」

そう言つて案内されたのは教会の真ん中に安置された大きな砂時計だった。

全長だけで7メートルくらいはありそうな巨大な砂時計。

装飾が施されていて、なんとも神々しいような印象を受ける。

……なんだろう。背筋がピリピリする。

見ているだけで本能のどこかが刺激されるような変な感覚が俺の体を駆け巡っていた。

砂の色は……赤い。

サラサラと音を立てて落ちる砂に視線を向ける。

落ちきるのもう直ぐだというのは俺にも分かった。

ピーンと盾から音が聞こえ、盾から一本の光りが龍刻の砂時計の真ん中にある宝石に届く。

すると俺の視界の隅に時計が現れた。

02:22

しばらくして22の目盛りが21に減る。

ばるほど、正確な時刻がこうして分かるようになるという訳か。これに合わせて行動しろと。

時間なさすぎだろ

「ん？ そこにいるのは尚文じゃねえか？」

しっている声が奥のほうから聞こえて来た。

見るとゾロゾロと女ばかりを連れた槍の勇者、元康が悠々と歩いてくる。

「お前も波に備えて来たのか？」

目付きがなんともいやらしい。蔑むような視線で俺を上から下まで一瞥する。

「なんだお前、まだその程度の装備で戦っているのか？」

失敬な、少なくとも初心者に着れば俺の全力を2〜3回生き残れる装備だぞ、つてそうか見た目変えるの忘れてた

廃人くらいになると廃人産の私服≧NPC産の最高性能重量装備だからな

元康は約一ヶ月前の時とは雲泥の、30Lv程度だと一目で分かる装備をしていた。

鉄とは違う。銀のような輝く鎧で身を固め、その下には綺麗な新緑色の高そうな付与効果がついているだろう服を着ている。しかもご丁寧に鎧の間にくさりかたびらを着込み、防御は絶対だと主張しているかのようだ。俺の足元にも及ばないかわいい防御力だ。

持っている伝説の槍は最初に会った時の安そうな槍ではなく、なんとも痛そうな、それでいてカツコいいデザインの矛になっていた。

矛は……まあ、槍だよな。

「あまり装備が目立つと狙われやすくなるから弱く見せてるんだよ」

「ちよつとあんた！この剣どうにかしなさいよ！」

元康に弱い装備にしている理由を話していると元康の後ろからメインが前よりも凶悪な外見になった魔剣を俺に突き付けてきた

あの感じだともう少しだな

「ナオフミ様？　こちらの方は……？」

ラフタリアが首を傾げつつ、元康たちを指差す。

「ああ、そのこの槍を持っている奴は槍の勇者だ、たいして強くは無いから覚える必要はないぞ。」

「はあ!？」

と、俺がラフタリアに元康達を紹介していると、入口の方から樹と鍊がやってきたんだ、みんなしてここに来るの忘れてたのか？

「お、樹に鍊か。」

「あ、元康さんと……尚文さん」

樹は俺を見るなり不快な者を見る目をし、やがて平静を装って声を掛ける。

「……」

鍊はクール気取りで無言でこちらに歩いてくる。やはり装備している物が旅立った日より遥かに強そうな物で占められている。

それぞれ、ゾロゾロと仲間を連れて。

時計台の中はそれだけで人口比率があつという間に増えた。

4 + 12 + 1

4は俺達、召喚された勇者で12は国が選んだ冒険者、そして1はラフタリアだ。

17人も居たらそりゃあ、うつとうしくもなる。

「あの……」

「誰だその子。すつごく可愛いな」

「あ？お前何うちのラフタリアに指差してんの？腐らすぞ？」

元康がラフタリアを指差してほざく。

こいつ、女なら何でも良いんじゃないのか？

勇者が幼女に欲情とは……この国も終わったな。

しかも鼻にかかった態度でラフタリアに近づき、キザったらしく自己紹介する。

「始めましてお嬢さん。俺は異世界から召喚されし四人の勇者の一人、北村元康と言います。以後お見知りおきを」

「は、はあ……勇者様だったのですか」

「」

おずおずとラフタリアは目が踊りながら頷く。

「あなたの名前はなんでしょう？」

「えつと……」

困ったようにラフタリアは俺に視線を向ける、ふむ……別に名乗る必要はないしその槍の名前を覚える必要もないんだがな……

「……気持ち悪いです」

「ブフツ」

「な!?!」

ラフタリアに名乗らせようか悩んでいたら元康に気持ち悪いと言いだして、俺は思

わず吹いた

「アナタは本日、どのようなご用件でここに？　アナタのような人が物騒な鎧と剣を持つているなんてどうしたというのです？」

「それは私がナオフミ様と一緒に戦うからです」

「え？　尚文の？」

「元康が怪訝な目で俺を睨みつける。

「……なんだ、うちの子は渡さんぞ」

「お前、こんな可愛い子を何処で勧誘したんだよ」

「元康が上から視線で俺に話しかけてきた。

「お前に言うことじゃないな」

「てつきり一人で参戦すると思っていたのに……お嬢さんの優しさに甘えているんだな」

「ここにいる全員より強い奴に言うか……」

俺は鍊と樹の方にある出入り口の方へ歩き出す。

二人とその仲間は道を開ける。

「波で会いましょう」

「足手まといになるなよ」

「こつちのセリフだ、勇者という肩書に振り回されて、もつとも重要なこと忘れるなよ？」

事務的でありきたりな返答をする樹と、お前は何処まで偉そうなんだという勇者様態度の鍊に軽く釘を刺しつつ、背を向ける。

ふと振り返るとラフタリアがオロオロとしながら周りをキョロキョロとしつつ俺の方へ駆け寄る。

「行くぞ」

「あ、はい！ ナオフミ様！」

俺が声を掛けた所、やっと我に返ったのか元気に返す。

時計台を後にした俺達は城下町を抜けて草原の方へ出る。

「な、ナオフミ様？ どうしたのです？」

「ラフタリア、今から拠点に戻るからついてこれるならついてこい」

波まであと二分

準備するには少し長すぎるくらいだ。廃人は基本自身の最強装備を私服に加工している為そこまで準備に時間をかけない

0から100まで一気にスピードを上げた俺は一瞬で拠点に着き、拠点の中にある倉庫に入った

「えーっと、波つてことは四聖オンラインにおける月一イベみたいなものだろ……？」
 だとしたら廃人が来る可能性がある、新規鯖の連中ならラフタリアでも無双できるが
 鍊達じゃ足元にも及ばないし、近くに村とかあつたら更地になってしまう

俺は倉庫の奥にしまった装備を引きずり出し手早く装備する

THE・Fortress+99?3?1に付き+99つまり+297(全身装備)

被ダメージ上限減少(極大) この効果が付いているとき被ダメージが割合になる下限0
 %。小・中・大・極大順に上限が50%↓35%↓20%↓5%となる 斬撃免疫 打
 撃免疫 刺突免疫 魔法免疫 HP自動回復(2000HP/0.5s) SP自動回
 復(1000SP/1s) 被ダメージ蓄積(上限500000) 減ったHP分蓄積 H
 P減少(大) 移動速度上昇(極大) 効果範囲拡大(減少値小) 軽量化 不壊 魔力装
 甲消費MP分の疑似HPを発動する(使用時MP消費) 魔力ブースター使用中MPを
 使用し続けるが高速で空を飛ぶことができる(使用時MP消費) 眷属召喚(SP消費
 (大)&上限5) ステルス迷彩(SP消費) オートマッピング カウンタースキル使用
 時蓄積ダメージ上乗せ Sacrifice

Shield・of・Fortress+99?3(スモールシールド)

防御時範囲拡大(SP消費) 防御ダメージ吸収盾に当たった攻撃を吸収、HPは減ら

ない（上限300000） カウンタースキル使用時吸収ダメージ上乗せ 周囲常時攻撃上昇（極大） 周囲常時防御上昇（極大） Relief使用時自身のHP上限消費、消費したHP分味方にシールド付与 身代わり半径30m以内の味方被ダメージの100%を代わりに受ける 防御無視（極大）相手の防御力の8割を無視してダメージを与えることができる 装備時MP自動回復（3000MP/2s） 攻撃時自身にダメージ（3%）

一部スキルで封印取り消し線⇨封印状態、封印状態のスキルは使用不可しているが俺の全力装備だ、オーバーキルだ！とか言われそうだが関係ない、野良廃人一人いれば一國が滅びるんだ。勇者として召喚された以上被害を出すわけにもいかない
 装備を整えて今か今かと待ち続けていると

00:00

ビキン！

世界中に響く大きな音が木霊した。

次の瞬間、フツと景色が一瞬にして変わる。転送されたのだろう。

「空が……」

まるで空に大きな亀裂が生まれたかのようにヒビが入り、不気味なワインレッドに染

まっている。

「まるでブラッドムーン四聖オンラインにおける不定期イベント、朝になるまで野良廃人が吹き飛ばされる程度のモンスターが湧くようになる。鯖の総合力に応じてモンスター湧きと強さが変わるだな」

そう独り言しながら何処に飛ばされたのか辺りを確認しているとダツと飛び出す影が3つ。そしてそれを追う12人。

俺以外の勇者達か

俺と同じく転送されたのだから当たり前だけど、何処へ向っているんだ？

と、走っていく先を見ると亀裂の中から敵がウジャウジャと湧き出ていた。

「リユート村近辺です！」

ラフタリアが焦るように何処へ飛ばされたか分析する。

「ここは農村部で、人がかなり住んでいますよ」

「もう避難は済んで——」

ここでハツと我に返る。

何処で起こるか分からない厄災の波だぞ？ 避難なんてできるわけが無い。

「ちよつと待てよ、お前等！」

俺の制止を聞き入れず、三人の勇者とその一行は波の根源である場所に駆け出してい

く。

その間にもワラワラと溢れ出た化け物たちが蜘蛛の子を散らすように村のある方向へ行くのが見えた。

で、勇者一行が何をしたかという照明弾のような光る何かを空に打ち上げたただけだった。

騎士団にこの場所を知らせる為とか、そんな所だろう。

「チツ!! ラフタリア! 村へ行くぞ!」

リユート村はまだ避難すら始まっていない。

波で死なれたらそれこそ寝覚めが悪い。

「はー!」

俺達は初心者共とは別の方向に駆け出した。

村に着くと、丁度、波から溢れていた化け物たちが、まさに暴れだす瞬間だった。

駐在していた騎士と冒険者が辛うじて化け物たちと戦っているが、多勢に無勢……防衛線は決壊寸前だ。

「ラフタリアは村民の避難誘導をしろ」

「え、ナオフミ様は……？」

「俺は敵を惹き付ける！」

防衛線に駆け出し、イナゴの群のような魔物に向けて盾を使って殴りかかる。

殴られた魔物は弾け飛び、同時に自分の身体に罅が走る、が逆再生のように元に戻る

「グギー！」

イナゴのような小さな魔物が群を成して俺に向って襲い掛かる。他にハチ、グールと化け物の種類は決まっているようだ。

ガン！ ガン！ ガン！

当たり前だがこの程度の敵ではダメージすら入らない

「ゆ、勇者様？」

「ああ……お前等、ちようどいいきさつきと立て直せ！」

「は、はい！」

これ幸いにと、深手を負っていない奴まで下がり、防衛線が俺一人になった。

「……ええ」

何を考えていやがる。

半ば呆れつつ、魔物たちは俺を倒そうと牙やハリ、爪で攻撃してくる。

ガキンガキンと音を立てているけれど、痛くも痒くもない。ただ、全身を這われる感覚は気持ち悪くてしようがない。

今度は軽く腕を振るう

すると魔物たちは一斉に吹き飛ばされ、遠くにいた魔物を巻き込んでいった

つたく、この世界の連中はどうしてこうも人任せなんだ？

「た、助け——!!」

新人時代世話になっていた宿屋の主人が後方で化け物に襲われそうになっている。

魔物の爪が宿屋の主人を貫こうとする瞬間、俺は叫んだ。

「『眷属召喚』!!」

スキルを唱え、宿屋の主人を守る眷属を呼び出した。

突然現れた眷属に宿屋の主人は驚いていたが、俺の方を向く。

「早く逃げろ!」

「……あ、ありがとう」

腰が抜けていた主人は礼を言うと、家族と一緒にその場を去った。

「きゃあああああああああああああああ!」

絵に描いたような絹を裂くような悲鳴。

見ると逃げ遅れたらしき女性の方へ魔物が群を成して近づきつつある。

「住民を護れ!! アイアス!!」

召喚した眷属に女性を護らせる。

突然の眷属の出現に、化け物たちはターゲットを眷属に変更する。

そうだ。そいつを狙え。狙いは俺達だけで良い。

アイアスと呼ばれた眷属は護るために女性から離れ魔物を連れてくる

だんだんと押し掛かる魔物が多くなつて鬱陶しくなってくる。

いい加減カウンターを発動しようとする、そこに降り注ぐ火の雨。

魔物の群れの中から外を見ると騎士団が到着し、魔法が使える連中が火の雨をこちらに向けて放っていた。

「おい! こっちは味方がいるんだぞ!」

ダメージは一切入らないがな。

あつという間に引火して燃え盛る魔物たち。

昆虫が多いからな、火の魔法で燃え盛っていく。

真紅に燃え盛る防衛線の中、味方の誤射とはやはり役に立たないNPCなんだろうか

と腹が立ちながら、俺はその戦場からツカツカと騎士団を睨みつけながら近づき、マントを靡かせ、炎を散らす。

「ふん、盾の勇者か……頑丈な奴だな」

騎士団の隊長らしき奴が俺を見るなり吐き捨てた。

そこに飛び出すように鞘に納まった刀を振りかぶる影。

ガキンと音を立てて吐き捨てた奴は剣を抜いて鏑迫り合いになる。

ラフタリアめ、殺すことに躊躇して手加減したな？戦場で人が死んでも魔物のせいにするのには

「ナオフミ様に何をなさるのですか！ 返答次第では許しませんよ！」

殺意を込めて、ラフタリアが言い放つ。

「盾の勇者の仲間か？」

「ええ、私はナオフミ様の剣！ 無礼は許しません！」

「……亜人風情が騎士団に逆らうとでも言うつもりか？」

「守るべき民を蔑ろにして、味方であるはずのナオフミ様もろとも魔法で焼き払うような輩は、騎士であらうと許しません！」

「五体満足なのだから良いじゃないか」

「良くありません！」

ギリギリと鏑迫り合いを続けるラフタリアを騎士達は囲む。

……はあ

溜息をついた俺は地面を強く殴りつける

それだけで地面は陥没し、衝撃が騎士団達を吹き飛ばす

「な、貴様——」

「アイアス、そいつ黙らせろ」

鏑迫り合いの相手をアイアスに任せ、俺は多勢に無勢を働こうとした騎士達を睨む。

「……敵は波から這いずる化け物だろう。履き違えるな！」

俺の叱責に騎士団の連中は分が悪いように顔を逸らす。

「犯罪者の勇者が何をほざく」

「なら……俺は移動するから、残りはお前達だけで相手をするか？」

燃え盛る前線から魔物たちが我が者顔で蠢き、最前線にいる俺に襲い掛かる。

その全てを耐え切っている俺に、騎士達は青い顔をした。

仮にも俺は盾の勇者だ。コイツ等だけでは持つはずもあるまい。

「ラフタリア、避難誘導は済んだか？」

「いえ……まだです。もう少し掛かると思っています」

「そうか、じゃあ早く避難させておけ」

「ですが……」

「味方に魔法をぶつ放されたが、痛くも痒くもない。ただ……俺が手も足も出ないと舐めた態度を取っているのなら……」

ラフタリアの肩を叩きながら、騎士団を睨みつける。

「……消すぞ。どんな手段を使っても、俺はもう一度魔王としてこの国を消す」

俺の脅しが効いたのか騎士団の連中は息を呑んで魔法の詠唱を止める。

「さて、ラフタリア。戦いを始めるのは邪魔な奴等を逃がしてからだ。なに、敵はいっぱいいる。それからでいい」

思いのほか、耐えられるようだからな。これなら大丈夫そうだ。

「は、はい！」

指示に従い。ラフタリアは村の方へ駆け出す。

「くそ！ 犯罪者の勇者風情が」

アイアスに押さえつけられている隊長らしき人物が俺に怒鳴りつける。

「そうか、じゃあお前。一人であそこ行ってこい」

俺の背後に迫る化け物たち。

「アイアス、その雑魚あそこに投げ込め、少しは時間稼ぎできるだろう」

はあ……まったく、どいつもこいつも、碌な奴が居ない。

俺が勇者じゃなかったらこいつらなんて消し飛ばしていたというのに
背後から聞こえる悲鳴を無視して俺は住民の避難誘導を手伝った

その後、足止めが効いたお陰か波から溢れ出た化け物の処理はある程度完了した。彼の犠牲は仕方がなかった、コラテラルダメージだ（棒）

邪魔な連中の避難を終えたラフタリアが前線に復帰すると俺は攻撃に撃って出た。騎士団の連中の援護を利用しつつ、空の亀裂が収まったのは数時間も後の事だ。

「ま、こんな所だろ」

「そうだな、今回のボスは楽勝だったな」

「ええ、これなら次の波も余裕ですわね」

波の最前線で戦っていた勇者共が今回の一番のボスらしきキメラの死体を前に雑談交じりに話し合いを続けている。

民間人の避難を騎士団と冒険者に任せて何を言ってやがる……。

一ヶ月も経っているというのにゲーム気分の抜けない奴等だ。

「まだ終わってないぞー！」

俺はそんな油断しきっている三人に声をかける

「は？何言ってるやがる」

「ボスは倒したでしょう？」

「ここにきて足を引つ張るきですか？」

三人はこちらに目を向け苦笑するが、まだ空の亀裂は閉じていない。そして
「来るぞ！上だ!!」

三人に叫ぶと漸く三人は視線を上にあげ、驚いた声をだした

「あれは……」

「人です！人が落ちてきます！」

「まさか、あれがボスというんじゃないんだろうな!!」

そのとおりだ、そして落ちてくる奴を俺はよく知っている

「気を付けろ！そいつは俺と同じ廃人プレイヤーだ!!」

魔王廃人VS上級廃人

空の亀裂から人が降ってくる。

普通の人なら空に亀裂があることに疑問を抱くがこの世界じゃ定期的にあることだ。だが、空から人が降ってくると思うか？

答えはNOだ

奴はそういった心理の隙を突いて奇襲をかける廃人だ、今回は空に亀裂があったから気づけたが、四聖オンラインでは晴れ時々奴と言われるくらい空から降ってくる

奴のプレイヤーネームは『爆散流れ星』、

奴の攻撃方法はいたって単純、空から高ければ高いほど威力が上がるスキルを使って落ちてくる、以上だ

奴を知る廃人なら何らかの手段で対応し、奴は花火と化すが。あいつの着地点にいる三人はまだ初心者の域を出ない、それどころか明らかに着地成功しても地面のシミになる高さから降ってきているのだ。

飛び降り自殺を見る有象無象のようにその場から動かず見る事しかできないだろう。そして最悪なことに俺じゃあいつを撃ち落とせない、

なぜなら対応武器を置いて来たからだ、受け止めることは可能だがこの世界はゲームに似た現実。受け止めた衝撃波がラフタリアと+αをミンチにする可能性がある

ならば奴が地面に衝突する時間内にできることを考えなければならぬ

今奴はスキルを発動し流星のごとく堕ちてきている

『眷属召喚』!!あの三人を護れ!!」

俺はとっさに眷属を三体追加で召喚し、いまだ動かずにいる三人を護らせる

奴はスキルの影響で爆発的に速度を増し既に奴の身を青い炎が焼き焦がしている

「ラフタリア!!俺の後ろに来い!!」

「ーは、はい!!」

ラフタリアを自分の後ろに避難させ、防御スキルを発動する

『Relief』!!『魔力装甲』!!」

Reliefを使い、眷属とラフタリアのHPに保護をかけ、魔力装甲で自身のHP

を元に戻るまで上昇させる

「これで最後!!『万里の長城』!!」

最後の防御スキルを使い、盾を巨大な壁へ変えた直後

星が落ちた

その威力は四聖オンラインの時より威力が上がリ、自慢の眷属のHPが一瞬で溶け、作り上げた壁は瓦礫と化し、自身のHPを半分まで削った

「があっ……っ!!」

痛い痛い痛い痛い!! 四聖オンラインじゃここまで痛みは発生しなかった! まるで焼却炉に入れられた気分だ!

ラフタリアは無事か?! +αは?! それ以上に俺のHPを半分も持っていきやがった!! 完全に四聖オンラインより威力が上だ!!

自身を焼く衝撃が収まった後、着弾地点に目を向けると、そこには命がけで役目を果たし灰となって消える眷属と、その灰に埋もれるように守られた+αが居た

この惨劇を生み出した張本人は爆心地で暢気に背伸びをし、まるでGWで10連休が決まったブラック企業のサラリーマンのような表情を浮かべている

「クハハハハハハハ!! 最っ高!! これだから流れ星はやめられない!!」

無傷のラフタリアを避難させ奴に近づくと、奴は焼かれた痛みすら快樂と言わんばかりの声を上げ笑っていた

「よう、久しぶりだな『爆散流れ星女性プレイヤー 槍 お嬢様言葉を緩くしてねっとりさせた言葉遣いが特徴 RPは隕石 最近の悩みは体重が減らない 本名 星空 花』」

「クハハハハハん？おや？おやおやおや!!誰かと思えば『フォートレス』さんじゃありませんかあ!」

俺が声をかけると奴は唐突に笑いをやめ、驚いた声を上げた

「確か貴方四聖オンライン中に寝落ちしてそのまま行方不明になったと聞きましたが、こんなところにいたんですねえ!!」

「ほう、そつちじやそうなるのか」

「ええ、おかげさまで攻勢に支障が出ましたよお。後RP?がれてますよお? 廃人の誇りどこやっただんですかあ?」

「おっと、スマンなこつちじやRPしてもただの痛い奴としか思われんからな……」

奴に言われたので周囲に誰もいないのを確認し、RPを始める。因みにイメーჯは筆頭廃人らしく傲慢な感じ

「それで?我おれは今忙しいのだが?」

「やっぱその口調貴方って感じがしていいねえ。まあいいわ、私もちよつと忙しくてねえ?そこの三人始末しなきゃならないの。どいてくれない?」

やはり狙いは灰に埋もれた三人か、いや。あちらの狙いは俺を含めた勇者全員、俺より先に弱い奴を狙うか

状況は不利、こちらは三人を護りながら戦わなければいけないが、奴はそういうのを気にせずに殺せればいいからな

「へえ？ 我を無視して弱者を先に飛ばすか、少しは勉強したようだな？」

「そりゃあ貴方はどうやつても倒せないんですもの、ならせめて雑魚くらいは飛ばさなきゃここに来た意味がないしねえ？」

「はっ！ 我を倒せないのは貴様に継続火力が足りないからだ、防御しやすい瞬間火力ばかり上げやがって、なにより、我は今ここに不服にも勇者として呼ばれているんだ。

だったら仲間を護るのは当然だろう」

『アタックホルダー最高火力』に火力ないとか言いますか普通う？』

「我は世界最強だぞ？ その程度の火力、防ぎきれないとしても……ッ！」

奴と会話していると、背後に気配を感じ咄嗟に盾を振ると背後から忍者のような服装をし、短刀を盾に止められている人物がいた

「まさかお前もいるとは……気配遮断の腕を上げたな『シノビマル男性プレイヤー』 剣

リアル男の娘 RPは忍者 最近の悩み自身の性別がほんとに男か怪しくなってきた事 本名 伊賀 誠』

「腕を上げてても気付かれてガードされちゃ意味がないでゴザル」

シノビマルとか凄いキャラ濃いの来たな……此奴どっから来た？

『爆散流れ星』殿の背後につかまってたでゴザル」

「降下中『シノビマル』さん終始悲鳴上げてましたけどねえ……」

「（楽しそう）それで？他にもいるのだろう？それとも我がいたことに驚いて隠れる事しかできないか？」

「んだとごらあ!？」

「ちよ、ごらあ!!出ちやダメでしょ!!」

俺が挑発すると、簡単に出てきた

怒声を上げながら出てきたのは鈍器と言わんばかりの弓を持った女性、PN『借り人女性プレイヤー』弓 RPは山賊 最初に狩人と名前を入力しようとしたが間違えて借り人と入力 本名 山上 玲奈』

次に借り人を注意しながらも自分も出てきた女の子 PN『にやむ氏女性プレイヤー』盾 PRは聖女 猫が大好きで家に10匹以上いる 本名 猫宮 黎』

「これはまた、『爆散流れ星』を除けばPTプレイヤーじゃないか」

「おかげで肩身が狭くてこまるわあ、まあ作戦が失敗した以上貴方から逃げられないしい？覚悟決めますわあ」

そういつて槍を構える『爆散流れ星』、奴は廃人プレイヤーの中でも数少ない『変幻自在流免許皆伝』持ち、RPの都合上すべての攻撃をガードする俺にとってやりづらい相手だ、

奴が構えるのと同時に『シノビマル』も姿を消して視界から消える、『借り人』も矢を番え、矢にエンチャントを込める

そして残った『にやむ氏』は三人を応援している（戦力外）

「準備が整ったか？ならば来い!!」

「じゃあ……遠慮なく『変幻自在槍術・乱れ咲変幻自在流でありながら型を持った（矛盾）攻撃スキル 5fに2回の突き』い!!」

俺が両手を広げて待ちの姿勢に入ると奴は躊躇なく変幻自在流を放った

奴の槍は壁となり俺の全身を貫こうとするが、全く同じ場所に当たるわけではないので。順にガードしていく

「どうした？止まって見えるぞ?」

「やっぱ貴方化け物ねえ!」

「四聖オンラインのキャッチコピーは『常識を越えろ』である!つまりこの程度誰にでもできる!そら見えてるぞお!」

「?!『明鏡止水0・1秒だけ当たり判定を無くす回避スキル 再使用時間 5秒』!!」

奴の攻撃を捌きながら盾を後ろに振ると、動揺した『シノビマル』が現れ回避スキルを使つて逃げた

「よそ見していいのか?! 『ノヴァアロー』着弾時に広範囲に爆発するエンチャント 再使用时间 20秒!!」

「我が予想しなかつたとても思つたか!! 防げ! アイアス!!」

借り人がエンチャントした矢を気絶している三人に放つと同時に眷属へ命令を出す。眷属は三人のもとへ瞬間移動すると、右手から花卉のような半透明の盾が現れ、借り人の矢を防ぐ

「うっそだろおい!!」

「我がアイアスは眷属の中でも最速!! そして遠距離攻撃など無意味! どれ、そろそろ防ぐのも飽きてきたな『レイジカウンター』怒りの感情に応じて威力が上がるカウンタースキル 再使用时间 2秒!!」

「うっ!!」

嘘?! と短い言葉を最後まで言えずに奴は溶け、その余波で周囲にいた廃人を吹き飛ばし、アイアスが消滅した。その時のアイアスの表情は何とも言い難い表情をしていた

……スマン、アイアス

「あわわわわ『爆散流れ星』さんが爆散してしまいました!、他の皆さんも瀕死に……『癒

しの応援歌!! 運営の予想を斜め上超えたスキル PTのHP MP SP を即座に回復する 再使用時間 60秒」

唯一吹き飛ばされなかった『にやむ氏』が歌いだすと、吹き飛ばされた『シノビマル』と『借り人』が三色の光に包まれた

なんだそれは

「ああ、くつそいてえ……化け物にもほどがあるだろ。」

「まったくでゴザル、HPが後1で止まった時の恐怖はもう御免でゴザルよ」

「ほう、たかが応援で回復するとはな、相変わらず意味の解らないスキルだ、で? まだやるか?」

立ち上がった二人の前にスーツと移動し、戦意があるか聞くと

「……無理だ」

「三人で勝てるわけがないでゴザル」

「私回復したのに……無理ゲーです」

二人は投降し、ついでに離れた場所にいた『にやむ氏』も両手を上げ降参のポーズをした

「そうか、ではそこに並べ」

「「……はい」」

三人は自分の待つ未来を確信し、諦めた顔で横に並んだ

「では、疾くと死ね『レイジカウンター』」

「「ですよn」」

自分で自分の盾を叩き、スキルを発動させて目の前にいる三人を文字道理消滅させる、廃人業界じゃよくあることだ

三人を消滅させた後、空はいつもの色に戻り、やがて夜明けを迎えるだろう。

今回は有名な廃人と上級廃人だけだったが、これからの波でより強い廃人が来るだろう。この世界がストーリーと一緒にあれば、いつか奴らが来るだろう

その時まで、最低でも5人は上級廃人をなぎ倒せる仲間がほしい、でなければどうなることか……

矛と要塞の実践

城の庭は今、決闘会場と化していた。

辺りには松明が焚かれ、宴を楽しんでいた者達がみんな勇者の戦いを楽しみにしている。

しかし、奴らの中で決着がどう付くかは既に周知の事実となっているのだ。

攻撃する手段の無い○俺と、槍の勇者である元康の戦い。

盾の勇者一行と槍の勇者一行の戦い……ではなく、俺と元康の一騎打ちになった。

さすがに元康自身のプライドが許さなかったらしく、一対一になった。

結果は誰だって想像くらい出来る。俺にもできる。

現にこの手のお約束である賭博行為をする声がまったく聞こえてこない。

まあ城に居るのが貴族が多いと言うのもあるけれど、波で戦った冒険者だって居るのだ。

普通であれば賭博が行われないはずが無い。

つまりみんな分かっていて尚、俺に敗北を要求している。

鍊や樹も城のテラスからこちらを傍観して笑っている。

だが相手は俺だ。

どうせお前らは俺が負けると思っているのだろうか？そして俺がラフタリアを失う瞬間を楽しみにしているんだろう？

ふざけるな

また、また俺にラフタリアを失えと？

また俺から、この俺からラフタリアを奪うのか？

どいつもこいつも勇者としての、人の上に立つことの重要さを理解していない。

そもあいつらの世界で盾が弱かったのはどうせステ振りで火力を上げようとしたからだろうか？

誰もマゾプレイだの基地外プレイだのしようとしなかったのだろうか？

その程度で勝てるでも思ってるのか？ポ○モンじゃないんだぞ？

どうやら灸をすえる必要があるな、一度常識を、奴らがいかに愚かな考えをしていたか解らせる必要があるな。

そもそもこうなった原因は今日の前で開始を今か今かと待つ元康が原因だ。

「決闘だ！」

「いきなり何言ってるんだ、お前？」

ついに頭が沸いたか？

よくよく考えてみればゲーム脳の馬鹿だ。

助けるべき人を見捨て雑魚に突して勝ち誇るゴミだからな、元康は。

「聞いたぞ！ お前と一緒に居るラフタリアちゃんは奴隷なんだってな！」

闘志を燃やして俺を指差しながら糾弾する。

「へ？」

当の本人はご馳走を皿に盛って美味しそうに食事中だ。

「だからどうした？」

「『だからどうした？』……だと？ お前、本気で言ってるのか！」

「ああ」

奴隷を使って何が悪いというのだ。

俺と一緒に戦ってくれるような奴はいない。だから俺は奴隷を買って使役している。

そもそもこの国は奴隷制度を禁止していないはずだ。

それがどうしたというんだ？

「アイツは俺の所有物だ。それがどうした？」

「人は……人を隷属させるもんじゃない！　まして俺達異世界人である勇者はそんな真似は許されないんだ！」

「何を今更……俺達の世界でも奴隷は居るだろうが」

「元康の世界がどうかは知らない。けれど人類の歴史に奴隷が存在しないというのはありえない。」

考え方を変えれば、社会人は会社の奴隷だ。

「許されない？　お前の中ではそうなんだろうよ。お前の中ではな！」

そうだよ

「生憎ここは異世界だ。奴隷だって存在する。あるもの使って何が悪い、もしかしてあれか？　エリクサー症候群でも患ったか？」

「き……さまー！」

ギリツと元康は矛を構えて俺に向ける。

「勝負だ！　俺が勝ったらラフタリアちゃんを解放させるー！」

「残念だがそれは無理だ、ラフタリアはうちの子だし解放したところで俺は手放さん」

「黙れ！」

「なんだこいつ」

俺は元康を無視して立ち去ろうとする。何故なら勝負しても俺には得が無い。

「モトヤス殿の話は聞かせてもらった」

人込みがモーゼのように割れて王様が現れる。

「勇者ともあろう者が奴隷を使っているとは……噂でしか聞いていなかったが、モトヤス殿が不服と言うのならワシが命ずる。決闘せよ！」

「却下だ、そも決闘なんかしてみろ、こんなちんけな城じゃ一合ももたん」

王様は溜息をすると指を鳴らす。

どこからか兵士達がやってきて俺を取り囲んだ。

見ればラフタリアが兵士達に保護されている。

「ナオフミ様！」

「……何の真似だ？」

塵を見ればいかにもな顔で笑っている。

「この国でワシの言う事は絶対！ 従わねば無理矢理にでも盾の勇者の奴隷を没収するまでだ」

「……チツ！」

奴隷に施してある呪いを解く方法とか、国の魔術師とかは知っていそうだな。

そんなことするまでもなく既に俺用の物に変えてあるから解呪できるかは知らんが。

書面上、戦わなければラフタリアは俺のもとを去らないといけなくなる。

ふざけるな、やつと現実で出会えた相棒だ。

こんなくだらないことで離れるわけにはいかない。

「勝負なんてする必要ありません！ 私——ふむう！」

ラフタリアが騒がないように口に布を巻かれて黙らされる。

「本人が主の肩を持たないと苦しむよう呪いを掛けられている可能性がある。奴隷の言

う事は黙らせせてもらおう」

「……決闘には参加させられるんだよな」

「決闘の賞品を何故参加させねばならない？」

「そうか」

「では城の庭で決闘を開催する！」

ゴミ屑の一声で決闘の場所が決まった

「こいつ……まじか……俺の攻撃力は高すぎるんだぞ……どう手加減すればいいんだ

……!?!?

回想に浸っていると、俺と元康の間に審判が入る。

「では、これより槍の勇者と盾の勇者の決闘を開始する！ 勝敗の有無はトドメを刺す寸前まで追い詰めるか、敗北を認めること」

手首が外れることなく上手く回るか試し、弾けないよう指を鳴らしつつ、俺は構える。「矛と盾が戦ったらどっちが勝つか、なんて話があるが……今回は余裕だな」

元康に至っては鼻に掛けた態度で俺を蔑むように睨んでいる。

「では——」

元康、戦いは相手を倒すことだけじゃないことを教えてやる。

矛盾とは最強の矛と盾を売ろうとした商人にどっちが最強なんだと聞いた回りの連中から話が始まる。辻褄が合わない事を指す言葉だ。

だけど、この矛盾という言葉自体が、矛盾であると俺は思っている。

そもそも、何を持って勝負が決まるというのか。

W・A・S・Dと壺男で勝負するようなものだぞ。

だが、それでも勝負するなら持ち手はどうだ？

矛の目的は相手を殺す武器。

盾の目的は持ち手を守る防具。

ここまで視線を広げると、最強の矛から持ち手を守った盾の勝利、であるという考えもある。

根本的に目的が違うのだ。矛と盾では。

「勝負！」

「うおおおおおおおおおおおおお！」

開始とともに元康は俺のもとに一直線に走ってくる。

しかし、おっそい……。

え？まだそこなの？俺なら秒もかかんないぞ？

槍を構えながら走り寄る元康に向け、俺はテレフォンパンチの構えをし、そのまま虚空を殴りつけた。

「ショットガンナツコオ弾丸となる部位を高速で震わせながら『無』を殴ることで部位の先を粉々にしながら射出する技、尚回収しないと踏まれて多段ヒットして死ぬ、正式にはショットガンナツクル!!」

「は？ぐあぁ!?!」

虚空を殴りつけた俺の右拳は粉々に砕け散り青白い弾丸と化して元康の全身を殴りつけた。

「てめえ！何しやがった！いやほんとに何しやがった!?!」

「シヨットガンナツクル、俺の世界で盾の勇者がまだ雑魚として認識されてた頃にあるマゾゲーマーがバグを利用して生み出した技だ」

「なんだそれ!？」

「さあ、どうする？俺にはまだ左手と右足と左足があるぞ？しかも足の場合DPSは約3倍だ。」

「ただの自殺技じゃねえか!」

「そだよ!もう使わんけどな!」

「くそっ!だが弾丸ということは直線にしか飛ばないはず……なら!」

そうつぶやいた元康は今度は段丘付けながら不規則に動きながら近づいてくる。

何もせずに傍観していると何を思ったのか元康はにやりと笑いながら、槍を突き出してきた。

「おっと!?!」

元康の突きだした槍を危なげなく避けようとしたとき、左足の膝裏に、軽い衝撃が襲い体勢を崩した。

辺りを見渡すと、元康のパーティの一人がこちらに手ををかざしていたのだ。

おそらく、風の魔法だ。

確か、ウイングブローという拳大の空気の塊を当てる魔法。

空気の塊故に見た目は透明。良く見なければ視えない。

そいつはしてやったりという笑顔を浮かべているが、それじゃあまだまだだ。

「そこだあああ!!」

「……何度も言うが」

体勢を崩した俺に元康が槍を振り下ろしてくる、が。

俺は体勢を崩したままその槍の穂先を握りしめた。

「遅いし、弱い」

「……は？」

呆ける元康を無視して俺はそのまま体勢を戻しながら続ける。

「そもそも、お前らは勘違いをしている、元康の攻撃力じゃ俺に傷をつけることはできないし、あまり知られてないが盾役のスキルの一つに防御力の何割かを攻撃力に変えるスキルがある」

「このっ！離せ！」

「聞いちゃいねえ……」

しかしどうしたものか、このまま殴つてもいいがそれではつまらない、はつきり言つてこつちの勝ち確だったからあそこまでキレる必要もなかったのに、やっぱラフタリア好きすぎだな俺。

……あ、あれがあったか。

俺はおもむろに何も無いところを力強く掴み、元康に振り下ろした。

「いつてえ!？」

「ククク、痛かろう? 『無』の攻撃は?」

「は? は?」

「何を言っているのかわからないようだな、安心しろ俺もだ。」

まさかほんとにできるとは思わなかった。

その後も元康は必死に攻撃してきたがその全てが意味をなさず、ただ一方的にダメー
ジを受け続け。

「はあ……はあ……」

「そろそろ、限界か?」

「はあ……まだだ!」

「言っておくが何しても無駄だぞ? 諦めないのは感心だが、それで実力が埋まるわけ
もないんだ、だから」

そこで言葉を区切り、少しのための後弓を引き絞るように左腕を引き、続ける。

「その諦めの悪さを称賛し、少しだけ、そうだな……10%位の力を見せてやる。」

そういつて、動くこともままならない元康に向けてスキルを発動させる。

『シールドバツシユ!』

勢いよく放たれた一撃は元康を吹き飛ばし、轟音と共に城の壁の向こうへ吹き飛ばした。

死んでなければいいが、まあこれであいつ等も少しはおとなしくなるだろう。

大人しくならなかつたらもう少しやればいいだけだし。

……それはそうと元康の奴死んでないよな？

まあいいか、さて俺が勝つたんだしラフタリア呼んで帰るか。

「帰るぞラフタリア!」

「はい!」

試合目とは別の意味で静かになった広場から俺たちは家に帰った。

廃人式卵ガチャ

前回と同じく、10時ごろに俺達は謁見の間に通された。

たく、配るのが翌日だったのならさつさと言えば良いものを……この生ごみは俺への嫌がらせに国でも掛けているのかってんだ。

ただでさえ顔を合わせるのも気まずい奴等と一緒に居るんだ。顔に穴が空いたらどうするんだ。

「では今回の波までに対する報奨金と援助金を渡すでしょう」

報奨金？

ツカツカと金袋を持った側近が現れる。

「ではそれぞれの勇者達に」

金袋の方に視線が向う。

確か、月々の援助金は最低でも銀貨500枚は確定しているはず。

既に使いきれないほどの金を持つ俺ならともかく他の勇者は大変だな。

「やりましたね」

ラフタリアが俺に向かって微笑む。

「そうだな（）」

今回の金をどう使うか。

とりあえずラフタリアの防具あたりが妥当か？ それとも、この際だから良い素材を買って自分で作るという選択もある。

ああ、でもそろそろ薬の調合で使う材料の新調もしたい所だしなあ。材料は普通に痛むから、定期的に集めるか買いかしないか。

ジャラジャラと金袋の音に、何を買うかの夢が広がる。

俺は金袋を手渡され、中身を確認した。

ひーふーみー……うん。500枚ある。

前回みたいに乱数調整しなかったからこれは固定だな。

「モトヤス殿には活躍と依頼達成による期待にあわせて銀貨4000枚渡しておくとして」

ん？

文句を言ったらそれこそ、何倍もの嫌味を言われそうだから黙っているが。

お？なんだ？また俺だけのけ者でクエストでもあったか？

「次にレン殿、やはり波に対する活躍と我が依頼を達成してくれた報酬をプラスして銀貨3800枚」

お？

クールを装っているが、元康に負けているのが悔しいような顔つきで鍊が金袋を持っている。

しかも小声で「なぜ昨日無様にやられたやつより……」と呟いている

「そしてイツキ殿……貴殿の活躍は国に響いている。よくあの困難な仕事を達成してくれた。銀貨3800枚だ」

樹に至ってはこの辺りが妥当でしょうと呟きつつ、やや死んだ目をしているのがわかる。

やっぱクエストか。

「ふん、盾にはもう少し頑張ってもらわねばならんな。援助金だけだ」

誰が盾だ。俺だ。

嫌われているのは知っていたがここまでとは。

いやしかし昨日あんだだけ我俣をほざいたお前が言うのか。

「あの、王様」

ラフタリアが手を上げる。

「なんだ？ 亜人」

「……その、依頼とはなんですか？」

ラフタリアも察しているのだろう。報酬が少ないのは目を瞑って、別の所から尋ねる。

「我が国で起こった問題を勇者殿に解決してもらっているのだ」

「……何故、ナオフミ様は依頼を受けていないのですか？ 初耳なのですが」

「フツ！ 盾に何ができる」

一撃で国を5個灰にできます。

謁見の間が失笑に包まれる。

ああ、一回暴れて身の程解らせようかな？。

と思ったたらラフタリアの方から拳を握り締める音が聞こえて来た。

見ると怒りを押し殺していて震えている。

……エ。

「援助金を渡すだけありがたいと思え！」

「ま、全然活躍しなかったもんな」

「そうですね。波では見掛けませんが何をしていたのですか？」

「足手まといになるなんて勇者の風上に置けない奴だ」

お前らが気絶してる間に国灰にできるやつと戦って地形変えてたよ！

「民間人を見殺しにしてポストだけと戦ってれば、そりゃあ大活躍だろうさ。」

「ハッ！ そんなのは騎士団に任せておけば良いんだよ」

「その騎士団がノロマだから問題なんだろう。あのままだったら何人の死人が出たことやら……ボスにしか目が行っていない奴にはそれが分からなかったんだな」

元康、鍊、樹が騎士団の団長の方を向く。

団長の奴、忌々しそうに頷いていた。

「だが、勇者に波の根源を対処してもらわねば被害が増大するのも事実、うぬぼれるな！」

あれお前生きてたの!?

だがいい感じに忘れていようだ、都合がいいな！

「まあ報酬も受け取ったし、俺達はいろいろと忙しいんでね。金さえ貰ったらここには用がないんで行かせてもらおうぞ」

まあここですることもないしこの位で立ち去るのが妥当だろう。

「さて、盾」

誰が盾だ。

「なんだ。俺は貴様と違って暇じゃないんだ」

「お前は期待はずれもいい所だ。それが手切れ金だと思え」

つまり、これから波の後の報酬として援助金は無い！ という事を言いたいのだろ

う。

まあこんな「それは良かったですね、ナオフミ様」……え？

満面の笑みでラフタリアが答える。

「……え？」

「もう、こんな無駄な場所へ来る必要がなくなりました。無意味な時間の浪費に情熱を注ぐよりも、もっと必要な事に貴重な時間を割きましょう」

「あ……ああ」

なんかラフタリアが頼りになってきている気がする。

ギユツと手を握られると顔に血が集まっていくのを感じた。

「では王様、私達はおいとまさせていただきますね」

と軽やかな歩調で俺をリードし、俺達は城を後にする。

ラフタリアに引つ張られるままにしていると、見覚えのあるテントに連れてこられた。

「これはこれは尚文様。今日はどのような用事で？」

テントに顔を出すとあの紳士の奴隷商がもったいぶった礼儀の掛かるポーズで俺達を出迎える。

「おや?..」

奴隷商はラフタリアをマジマジと見つめて関心したように声を漏らす。

「驚きの変化ですな。まさかこんなにも美しく育つとは」

そう言いながら俺の方を何かガツクリ来るように肩を落とす。

「……なんだよ」

「もつと私共のような方かと思っていたのですが期待はずれでしたな」

残念ながら格が違うんだよ！

「ただ痛めつけるだけでなく時々飴を与え、徐々に品質を上げるのが良い奴隷使いだ、俺は聞いている」

やや声を低めにして答える

「だが、お前の言う奴隷は使い捨てなのだろうな?」

「な、ナオフミ様?..」

ラフタリアが上目使いで心配そうにこちらを見上げた。

自分でもちよつと調子に乗っていると自覚はある。

なんとこのか以前より少し余裕ができた。

「……ふふふ。そうでしたか、私ゾクゾクしてきましたよ」

紳士は、俺の答えが気に入ったのかこれでもかと笑みを浮かべる。

……つとあれは？

「あれはなんだ？」

一応紳士に尋ねる。

「ああ、あれは私共の表の商売道具ですな」

「お前等の表の仕事ってなんだよ」

「魔物商ですよ」

なんかテンション高めに答えられた。

ふむ。

「じゃああれはなんだ？」

「銀貨100枚で一回挑戦、魔物の卵くじですよ！」

「100枚とはなかなか」

俺達の所持金（貯蓄抜き）は銀貨508枚、かなりの大金だ。

「高価な魔物ですよえ」

「一応参考に聞くが、フィロリアルはお前の所じや平均幾らだ？」

「……成体で大体200枚からですかね。羽毛や品種などで左右されます。ハイ」

「成体という事はヒナはもつと安いのか。更に卵の値段だけで、育成費は除外……これは得なのか？」

「いえいえ、あそこにあるのは他の卵も一緒でございます」
「なるほど……くじだからな」

ハズレもあれば当たりもあると言う奴か。

ハズレを引けば目も当てられない。当たりを引けば元より高め。

「で、あの中には当たりが無いって所か」

「なんと！ 私達がそんな非道な商売をしていると勇者様は御思いで!？」

「え？」

「私、商売にはプライドを持っております。虚言でお客様を騙すのは好きではありませんが、売るものを詐称するのは嫌でございます」

「なかなかいい性格してんな……」

魔人になったらきつと上位には食い込むタイプだ。

「よし、じゃあ一個買おう」

「ありがとうございます！」

ゲーム時代と同じ位置にある、右側にある一個を選び、取り出す。

「では、その卵の記されている印に血を落としてくださいませ」

言われるまま、卵に塗られている紋様に血を塗る。

カッと赤く輝き、俺の視界に魔物使役のアイコンが現れる。

奴隸と同じく禁止事項を設定できるようだ。

まあ万が一抵抗されても被害ないし特に禁止しなくていいかな？

「もしも孵化しなかったら違約金とかを請求しに来るからな」

「ハズレを掴まされたとしてもタダでは転ばない尚文様に脱帽です！」

奴隷商の機嫌も最高潮に達している。まったく、潜在的な被虐願望でもあるんじゃないかな
いかコイツ？

「口約束でも、本当に来るからな。白を切ったら乱暴なうちの子が暴れだすぞ」

「私に何をさせるつもりですか!？」

「心得ておりますとも！」

紳士すつげー機嫌が良い。

「明日ごろには孵るな？」

「勇者様のご来場、何時でもお待ちしております」

こうして俺達は卵を持って、テントを後にするのだった。

復興への道～廃人を添えて～

さて、これからどうするか。

そう考えたところで特にやることがないことに気づく。

波で消費したものは無かったし、これ以上貯めこんだところで腐らすだけだ。

……帰って少し寝るか

……声が聞こえる

……誰かの……誰かの声が聞こえる

「……！……！！」

……鬱陶しい、放っておいてくれ

「……様！！フ……ス様！！」

……もう、疲れた……

「ナオフミ様！！」

「んあ？」

ラフタリアの声で夢から覚める。

……めつちや嫌な夢見た。

「ナオフミ様、いつまで寝てるんですか？もう日が暮れてしまいますよ！」

「ああ、悪い」

「ご飯！と急ぐラフタリアを追いながらベッドから出て、キッチンで料理を始める。」

異次元冷蔵庫から卵、玉ねぎ、人参とジャガイモ、各種スパイス（なぜか入る）を取り出し、野菜を先に刻む。

野菜を刻んでる間ラフタリアに卵をかき混ぜてもらいながら、盾に各種スパイスを放り込みカレールーに調合する。

玉ねぎを細かく、人参は一口サイズに、そしてジャガイモは少し大きめに切ったら、あらかじめ用意していた鍋に熱湯を注ぎ、野菜を適当なタイミングで放る。

ある程度煮たら別で用意していたカレーをこれまた用意していたご飯に装ってラフタリアがいつの間にか焼いていた卵焼きを被せる。

「はい、完成」

「とてもおいしそうですね！」

「すごく美味しいぞ、なぜなら俺の得意料理だからだ。」

一口食べて飲み込むとふわああああと喜ぶ（かわいい）ラフタリアを横に俺は黙々と食べる、うん美味しい。

暫くして食事を終え、食器を洗っていると、ふと思った。

「そうだ、リユート村どうなったんだろう」

「？」

あの村今復興でもしてるんだろうか。

暫く歩いていると遠くに綺麗に整地された世界に沢山の人たちが集まり、何かしている様子が見えた。

「よう、困ってるみたいだな」

「貴方は、盾の勇者様……」

人だかりの中に村長と思わしき人物がいたので話しかける。

「盾の勇者様……」

「ん？」

「我々は……これからどうすればいいのでしょうか……」

「これから……か」

「はい、家も畑も井戸も食料も何もかも無くなってしまいました……我々は、もはや生き延びる術がありません……」

「ふむ……一応、手はある」

生きる希望すら失っている村長に、希望があると伝えると、その目を見開き、先ほどより高揚した声で詰め寄ってきた。

近い近いすづい近いつかこの人めつちやつぶらな瞳してんな、どうなってんだ。

「本当ですか?! こんな、こんな場所に、何もなくなってしまったこんな場所にまだ希望はあると!」

「ああ、一応だが、ある」

「おお……どうか、どうかお教え願えませんか!」

「この世で最もシンプルで、何よりも信頼できる方法だ、それは……」

「それは……?」

少し溜めると村長は期待に満ちた声と目で訴えてくる。

まあかなり危機的状況の村だ、なんにでも縋りたいんだろう。

「強くなることだ」

「強く……ですか?」

そう強くなる、一見簡単そうだが

実はめっちゃ難しい、この世界はレベルが全てだ、だからモンスターを倒して、レベルを上げればそれだけで強くなる、ただし、レベルに合った装備と技量を持たなければ命を落とす可能性が高い。

ここで、俺の出番だ、勇者のパーティに入れば経験値にボーナスが入る、実際ラフタリアのレベルは既に100を超えた、獣人種特有のレベルが急激に上がると見た目が変わるという設定(?)が息をしていないがまあいい。

「自分でいうのもなんだが俺は勇者だ、そして勇者にはパーティにはいつているメンバーに取得経験値の増加が付与されるんだ」

「おお、つまり我々の幾人かが盾の勇者様のパーティとなつて残つた我々は復興へと行けば……!!」

「話が早いな、そうだ、だが今すぐとはいかない、今は生活の基盤を整えるのが先だ、幸い地形と地盤は戦闘の激化の影響で建築をする分には問題がない、そして若い連中に建築や農業の技術を教えてやれ、知識ある奴等がレベリングでいなくなつただけで何もできなくなるのは致命的だからな」

「わかりました、この際一子相伝などとは言つてられませんので、幸い村民に欠損はありません、あらゆる知識を継がせましょう」

「よし、じゃあ、早速建築からやっていくか」